

317  
354



\* 0 0 4 8 5 2 8 0 0 0 \*

2

0048528-000

特 2 3 7 - 7 4 2

小学校に於ける美育とその実際

藤谷庸夫・著

関印刷所出版部

昭和 3

AHI

この著作物は、著作権者不明のため、著作権  
第 6 7 条の規定に基づき、平成 1 2 年 3 月 2  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの



特 237  
742



小學校  
に於ける

美育とその實際

藤谷庸夫著

關印刷部發行

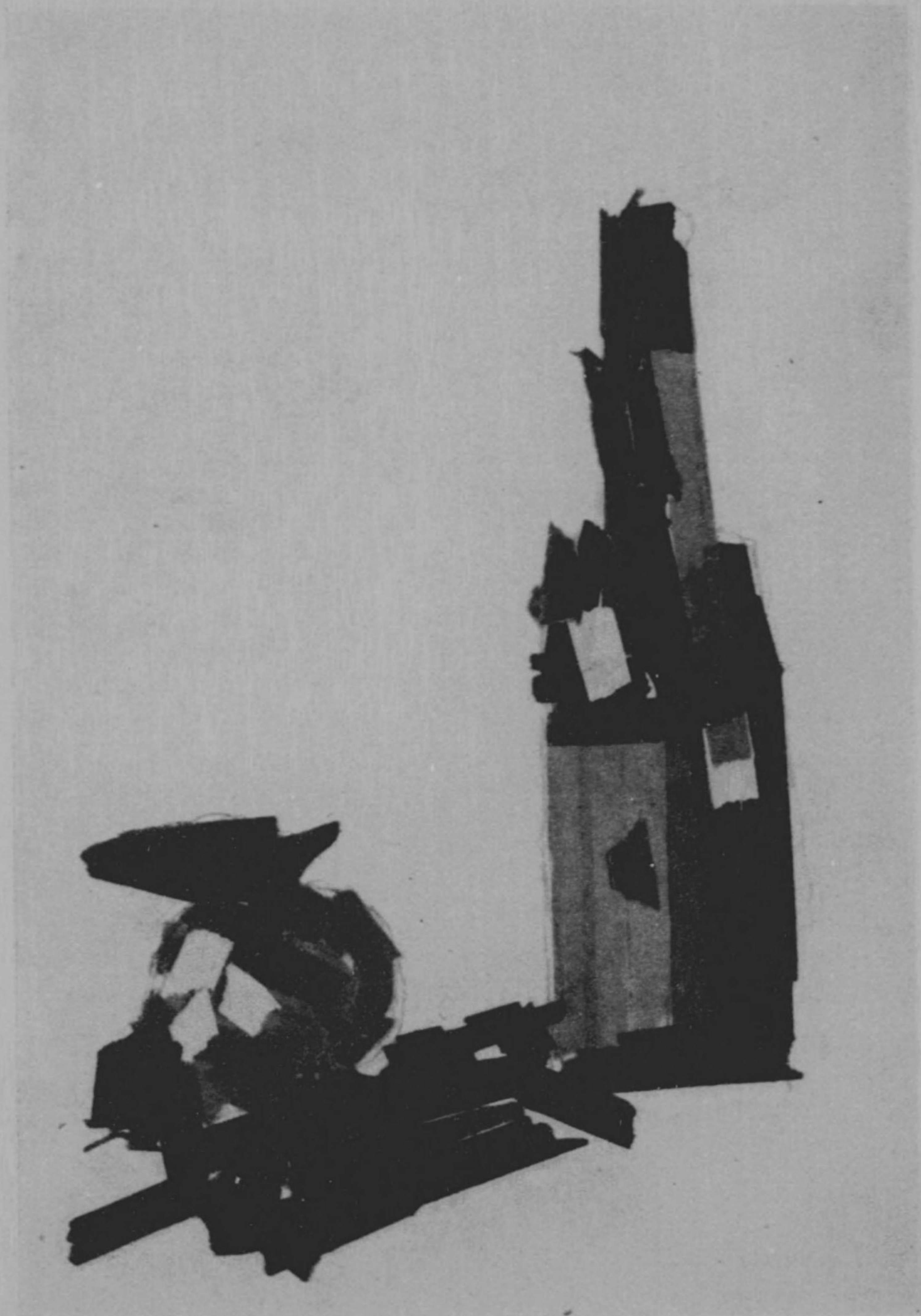




島 豐 二 尋 屬 附 範 師 媛 愛



善田竹四尋屬附範師媛愛



一 順 田 竹 五 尋 屬 附 範 師 媛 愛



心  
心  
心

廉 井 筒 六 尋 屬 附 範 師 媛 愛

## 序

小學校ノ圖書教授ハ近時標準ヲ失ヒ方針定ラズ、從ツテ成績甚ダ振ハズ、遺憾トスル所ナリ。

藤谷君茲ニ見ル所アリ、常ニ研究措カズ、曩ニ本縣初等教育部門ノ委囑ヲ受ケテ適切ナル圖書科教授細目ヲ編纂セラレ、本科教授ノ準則ヲ示サル。今又ソノ細目ニ基リ實際教授上ノ參考書ヲ著シ、本科指導ノ方針ヲ示サル。必ズ本科成績向上ニ貢献セララル、コト多キヲ信ズ。本書ノ研究ハ徒ニ理論ニ走ルコトヲ避ケテ常ニ實際ニ即シ、獨斷ニ陥ルコトヲ避ケテ常ニ實驗ニ基キ、地方ニ適切ニシテ然モ新味ヲ失ハズ、親切ニ實際家ノ好侶伴タランコトヲ勉メラル。誠ニ初等教育界ノ爲メニ慶賀スベキ所ナリ。願クバ大方ノ同志相共ニ斯道ノ研讀ニ力ヲ致サレンコトヲ。



## 序

床の間には山水の一軸とかけ、少しの空地にも花を植ゑる。空地がないと屋根の上に鉢植をならべる、これが日本人だ。駄馬に負はせた薪にも櫻の一枝、躑躅の一枝をさすことを忘れないのが日本人である、庭の石一つにも木一本にもその配置にいろいろ工夫をこらすのが日本人である。かくて美を好み、自然を愛する心情は我々民族の間に長い間育まれてきたのである。

世の中が複雑になるに連れて生活に追はれる事のみ多く、悠々自然を楽しむ暇がないばかりか、ふと見上げる空の美しさに心を打たれる事すらも少なくなつて、人の心は日毎にとげとげしさを加へてゆく。若しも山のたゞすまひや、雲の動き、水の流れ、さては路傍に咲く名もなき花にも深き愛着を覺える心情が世の人に深かつたら、人の世はどんなに和やかなになる事かと思ふ。

小學校に於ける圖書教育はこの數年間に異常な進展を遂げた。而し技巧の方面

を重んじて子供の心に潜む美を愛する心情を覺醒させ育むことに缺くる所はないだらうか。または技巧の稚拙を推賞するあまり、健全な發達を助長するといふ事に缺くるところがありはしないか。更に圖畫教育を心の教養の問題として眞劍に考へる教師が果して澤山あるだらうか。

藤谷君は美の教養について常に眞劍に考へてゐる人である。日頃の蘊蓄を傾けられたこの本は必ずやこの方面に大きな刺戟を與へる事と思ふ。小學校の先生方も父兄も、この本によつて今一度根柢から美の教育について考へなほして欲しいものである。

三月十五日

林 傳 次

## 序

文化の各時代は再び繰りかへす事の出来ない独自の藝術を生むやうに……  
 兒童の發育の各時期には又と得難い特立不羈の意義ある作品を作る……

聖き不満を抱き飽くことを知らぬ精進の人々  
 そして創造的深索と描出的藝能との結合のもとに獨創の世界を表現せんと努むる  
 人々

それらの精靈によりてこそ至純至高なる作品は生きる  
 繪畫藝術の眞義を解し藝術的感受性の豊かなる教育者でなければほんどうの美育  
 の効果はあげられない

私がかつて愛媛師範に奉職してゐた頃の學生であつた藤谷君が美術學校を卒業し  
 て母校に歸つたと聞いたことだけでも非常な悦びである

同君は絶えず自己藝術の進展に猛進すると共に教育の實際に熱と愛とを捧げつゝ

ある篤學の士である  
 今回小學校美育の教授書が同君の自信ある快著として公にせらるゝことは實に吾  
 事以上に會心の笑みを禁する事が出来ない  
 本著がひとり愛媛縣の教育界のみならず廣く全國の美育界に光輝ある貢獻を與ふ  
 ることを信する次第である

昭和三年三月三日

塩 月 桃 甫

## 序

兒童自身の眞の生活を指すなら誰しも恐らく趣味豊かなものである事は否定出來  
 ないだらうと思ふ。此豊かな趣味の生活の大部分は繪から來てゐると云ふても過  
 言ではあるまい。

然るに彼等兒童が教育さるゝに従つて段々に趣味から遠ざかつて行く様な傾向が  
 窺はれるが、之れは決してゆるかせに觀過すべき問題ではないと思ふ。思想問題  
 の上からも、人間生活の上からも。——之れは恐らく美育問題が閉却されてゐる  
 のに其因をなして居るのではないかと思ふて實は竊かに憂へて居つたのである。  
 拆りから藤谷君は自己の眞面目な研究と深い經驗とから今度美育の實際問題に解  
 決を與へる爲めに此書を書かれた事で、君の凡てを知りしかも現在同じく美育に  
 たづさはつて居る私として中心より之を喜ぶものである。

此書は平明で理論に走らず、實際取扱に關しては實に懇切鄭重である。恐らくは

此書に依つて今後の圖書教育は明快に發育して行くであらうと信ずると同時に多くの兒童の爲めに祝福するものである。過言であるかは知らないが今日の初等美育界は渾沌たるもので、非常に大切な美育がうまく行はれて居らないと思ふが、此時に當つて本著は斯界唯一の光明である事を信するが故に、一人でも多く教育家諸君に依つて讀まれることを希望するものである。終りに私は多くの可愛い、兒童の爲めに教育家諸君の爲めに、また藤谷君の爲めに本書の出現を祝して筆を擱くと爾云。

昭和三年三月

山本皓堂識

## 自序

昨年愛媛教育協會初等部門の委嘱を受け、私共數名の研究委員がその成案として「小學校圖書教育系統案」なるものを愛媛教育誌上に發表したのでありますが、この系統案は全くの大綱を示すものであつて、これが運用に就ては今少し具体的なものを書き度いと私は思つてゐたのであります。

仮令私が微力でも……今小學校でほんとに困つてゐる圖書——且つは又私のやつてゐる師範學校の圖書は直接小學校の圖書に繋る圖書であることを思ひ、美育に捧げる私の熱情がこの儘に放つて置くことを承知しなかつたのです。しかし願ひて愧かしく物足りないことを免れません。果しなく深い美育の世界に對しては、曠野を耕すほんの一畝でしかなくと思ひます。今後更に大方の御示教と御鞭撻によつて、又私自身の精進によつて、本書の實質を少しでもよりいゝものに培ひ度いと希ふ次第です。

尙大方が私の所信によつて主張するところを充分御理解下さつて、此の實際的、提案を、幾分なりと美育の上に賢明に御活用下さいますならば誠に幸に思ふ次第でございます。

x  
此小著に對して特に身に餘る序を賜つた佐伯校長、林傳次氏、久保儀平氏の御厚意を爰に謹んで感謝致します。又私の懐しい恩師塩月桃甫先生が遙かに臺灣より心からの序文を寄せて下さつたことや、やはり恩師である山本皓堂先生が衷心より祝して下さいたことも併せて深く感謝いたします。

尙附屬の谷口氏のお世話で兒童の繪を口繪に飾ることが出来たのも大變難有く思つてゐます。

また本書が出来たる爲めの過去一年半許りの間に、本書とは關係がないけれども私は恐ろしい色々な試練に遭ひました。此苦しみの中に於て本書の完成のために激勵を與へて呉れた親しい數人の友や、特に武内青鳥が熱い心盡しの數々は思ふ

さへ涙ぐましいのです。

更に俠氣を以つて此書の刊行を快く引受けて下さつた關定氏、及び何かと御盡力下さつた森下笹吉氏、さては特別にいろ／＼お骨折り下さつた關印刷部の方々に對しては感激の外ありません。

x  
最後に本書の書名「小學校に於ける美育とその實際」に就て、美育とは廣い意味で藝術教育と云ふことであり、美術教育の意味としても手工が這入るわけなのですが、本書は圖畫教育のみのものであるけれども差支ないと信じ、最もピツタリする名前と思つてつけました次第で爰に斷つて置きます。

昭和三年三月十五日

著者 藤 谷 庸 夫

目次

圖書教育の目的……………一

本質的な諸問題……………一

一、美とは？……………四七

二、個性と天分……………五二

三、美の感銘と表現——表現の技巧……………五七

四、創造と模倣……………六三

五、自由とは？……………七一

六、指導とは？……………七四

七、美育の勘定……………八二

各発達段階の大方針……………八九

教材

教材.....101

一、教材の四方面.....101

1、寫生畫.....101

2、記憶畫.....101

3、圖案.....104

4、鑑賞.....107

二、各學年教材の配當.....113

用具

用具.....113

一、兒童用具の選定.....113

二、各學年兒童用具の配當.....115

三、用紙に就て.....116

設備

設備.....116

一、圖書設備の不備.....116

二、教室と準備室.....115

三、教室及び準備室の設備.....117

四、寫生材料の蒐集.....117

五、鑑賞材料の蒐集.....119

六、參考書.....119

教材取扱の實際.....123

各學年記憶畫の取扱方針.....125

記憶畫教材例.....129

各學年寫生畫の取扱方針.....129

寫生畫教材例.....130

各學年圖案の取扱方針.....141

圖書教育の目的

目次

四

圖案教材例

四一五

鑑賞教材例

四五二

各學年の教材細目

四五三

——目次をばり——



それはずつと昔、全く今日の圖書教育から考へて見るとずつと昔だと云ふ氣がする。

明治四十年小學校令施行規則を以つて圖書教育の目的は明かに規定されてゐる。

圖書ハ普通ノ形体ヲ觀取シ之ヲ畫クノ能ヲ得シメ兼テ美感ヲ養フヲ以テ要旨トス

ところが此簡明な文句は、實は解釋の仕様で如何様にも取れるし、程度の問題となると随分漠然たるものである。

考へて見れば其處に法文の妙諦があるとも云へるので、時代の推移に依つて、或は實際家の運用に就て小さな束縛を與へないゆとりを持つてゐるわけだから、何もコセ／＼と其字義の末端をほじくつて自らの教育に窮窟な板圖ひをしてしまふ必要はない。又さう云ふことは眞に法の精神を生かす所以でもなく「伸びる」と云ふ教育の本義から云つて望ましくないことである。

文化は一時も休みなく推移し教育の上に絶えざる開展を促してゐる。教育は亦

人文の源泉で一刻も沈滞儉安を許されざる世界である。

事實此法令の發布後今日に至るまでの圖畫教育上の進展は實に驚く許りであつて、他の何れの教科に比してもその目醒ましい推移發展の有様は之に及ぶものがないと云つてよからう。

x

我國の圖畫教育の歴史を考へて見ると、明治五年の學制頒布と同時に圖畫は普通教育にちやんと取入れられてゐた。西洋で鉛筆畫をかゝせてゐると云ふので鉛筆畫をやつたものである。西洋心酔の反動で國粹保存の思想が擡頭すると圖畫も日本流儀に毛筆でやらなくてはいけないと云ふので毛筆畫をかゝせるやうなことになる、それ／＼二派に分れ各々の長所を主張し大騒ぎをしたものである。しかしどちらも何のために圖畫をやるのかそんなことには頓着なく、圖をひいたり畫をかいたり何しろ小手先きの技術だといふので盛んに専門家の弟子を仕込むやうなやり口で、一般の子供に取つては一向無意義な仕事をやらせたものである。兩

方が激しく争つて譲らないので文部省も放つて置けず、圖畫教育調査委員會なるものを組織して、どちらがいか研究させたところ、兩方ともいゝから兩方ともやらせたらいゝと言ふことになり、鉛筆毛筆併用時代と言ふことになり、器用に繪がかけるといゝ／＼實用になる許りでなく、眼で見たのを運動神經に移して筋肉運動に具体化して行くと云ふことは人間として實に必要な修練であると言ふやうな進んだ見解の發見もあり、遊戯半分だと思つてゐた圖畫が、仲々どうして實用的な國民養成には重大な學科だと言ふことがわかり……かくの如くして、明治四十年の法文が出来、新定畫帖と言ふ國定教科書が生れたのである。そして今もその法文は嚴然として存し、今も尙その國定教科書は廢せられてゐない。

しかし誰も知る。確か大正八年だつた。山本鼎氏が「自由畫の提唱」をなすに及んで、氏の圖畫教育思想は全國に宣傳され、十數年來の新定畫帖的圖畫教育は一朝にして地を拂ひ、殆ど全く自由畫の風靡するところとなつたわけであつた。之は實に圖畫教育上に劃時代的な一線を意味するものであつて、最早われ等の問

題のすべては自由書以後にかゝるので、それ以前を顧みるべくあまりに一切は明瞭であるが、其依つて來り、依つて去るところを目的觀の上に暫く考察を加へて見る必要がないでもない。

x

明治維新以來今日までに築き上げられた我國の物質文化は實に大したもの、世界各國の等しく驚嘆するところである。開國當時歐米各國の驚くべく、恐るべき文化に膽を奪はれた我國民は擧げて悉く之が輸入移植に全力を竭し、他念なく懸命に彼に及ばんことを力めて日もこれ足らざる有様であつた。科學の研究に、殖産興業に政治に、國家社會的なあらゆる施設經營に、進歩は更に加速度を以つて進歩し、彼がルネッサンス以來長年月を費して築き上げた文化を驚くべき短日月の間に悉く取入れて餘すところがなかつた。そして今や更に飛躍して各種の方面に於て歐米諸國を凌がうとする形勢にさへある。之は全く慶すべき興國の光輝たる現象であつてわれ等は更に／＼よりよき飛躍を希つて止まぬものである。

しかしよく考へて見ると今更深き悔恨がわれ等に殘されてゐる筈である。あまりに歐米の物質文化にのみ眩惑されたわが國民は只ひた押しに此物質文化に突進した結果、物質に對する正しき解釋を忘れ、物質を左右し手段とする本体、即ち己の精神的理想を忘れたがために、却つて己は物質の手段となり、世を擧げて物質至上主義者、唯物論者の群と化し、世相人情の荒廢を來し、文化の桎梏に人間生活の苦惱は増し、却つて如何にも住み心地の悪い世の中にしてしまつた形である。此事實はあらゆる社會事相の上に現はれて居り、自らの作つた陥穽のかくも深かつたことに等しく驚いてゐることは、誰も否定しないところである。つまり國民は何の用意もなしに此物質文化を取入れたがために、食傷してひどく健康を害してしまつた形である。

之をわれ等の教育の上に就て考へて見やう。凡そ教育教科に於て眞に精神教育に密着してゐた教科があつたかどうか。更に或は教育的見解に於て些かでも眞に精神的教養のために考慮が拂はれて居つたかどうか、不幸にしてさう云ふことは

全然なかつたと云つてもいゝ位である。よしさう云ふことがあつたとしても唯物的思想に於てか、又は理智的取扱に於てかであつて、眞に精神教育は生かされてゐなかつたと云つても過言ではないのである。

例へば唯一の精神教育の支持者であつたと考へられてゐる修身教科に就て願ふならば、單に徳目を並べ、一片の理論を以つて道を説くと雖も、それは要するに單なる知識の注入に過ぎず深く潜んでゐる本然の正体を揺り動かすところの力ではなかつた。今日漸く此處に氣付くところがあつて修身科にも、深き考慮が拂はれ、或は一方に藝術的教科の高調を見るやうになつて來たけれども、最近に至るまで實に教育はすべてかくの如く物質教育に終始して全く精神教育を閑却して居つたのである。その結果が明かに今日の厭ふべき社會状態を形成して居るのではあるまいか。

x

かくの如き教育思潮の渦中に生れたる新定畫帖的圖畫教育の見解乃至目的觀も

亦すべて物質的實用本位であつて乾燥無味な模式的取扱ひに依つて全然理智的教育を出でなかつたのである。今少しくそれを詳細に述べて見ると

その目的觀として圖畫科の國民教育に必要な所以は第一に自給自足的國家經濟上工業工藝の發達を期する立場から云つて、一般國民性の上に正確緻密なる觀察描寫の能力を養成する必要が認められなければならぬのみならず、個人的立場から云つても、獨り學校生活に於て他教科學習の上に精密なる物の觀察や描寫さしては工夫考察の能力が大切である許りでなく、工業や工藝方面に向ふ者に取つては、將來自分の職業上一層其修練が大事であり、左様な職業に向はない者と雖も將來彼等が營むべき日常の生活上必要な技能でなくてはならぬ。と云ふ風に解釋したのである。

そしてほんの副次的の目的として美感の養成と云ふことが、ちつとも結びつかない姿に於て附加されてゐたまでである。之を要約すると、

一、圖及畫の理解能力の養成

- 二、形象の正確緻密なる観察能力の養成
- 三、形象観察の表現能力の養成
- 四、形象表現上工夫考案能力の養成
- 五、美感の養成

此五つの目標を立てたことになるわけである。そしてこれを遂行するためと其模式を新定畫帖に盛つて形式的技巧乃至様式を授け、あらゆる場合に於ける普遍的能力を養成すると云ふ考へ方であつた。かくて新定畫帖が世に現はれた時は非常に進歩したる見解として教育界に大きなセンセーションを捲き起したものであつた。兒童の發達心理を考へ、表現方法に階梯を設け、聞えのいゝ整頓した目的觀をかざして何處から見ても拔目がないと思はれたのであつた。

十數年の間此思想に依つて、此方法に依つて新定畫帖の時代は續く。しかしそれは要するにすべて物質的、科學的、教育思想の所産である。美感等とは概念的に聞けはいいが、全然つけたりに過ぎなかつた。偏重の教育、物質偏重の教育に

革命は當然來なくてはならぬ運命であつた。一朝自由畫教育の提唱さるゝや、かくも圖畫教育の完璧と目され、小搖ぎもせぬと思はれて居た新定畫帖的教育は忽ち根底から覆つてしまはねばならなかつたのである。

今も新定畫帖は廢されたと云ふわけではないが名實共に亡び全く過去の遺物となつてしまつた。最早其處には現在に通ふ血がない、生命がない。時代は進む。思想は進展する。力に就くもの、生命に依るものに取つては遂に顧る暇もない。己に思想上の根本的相違から目的觀の置き所が異つてしまつたのである。

x

山本鼎氏に依つて提唱されたところの「自由畫教育」は實に新定畫帖的圖畫教育を完全に葬り去つた唯一發の巨彈であつた。此巨彈以後の急激なる發展を見た今日の圖畫教育思潮から眺むれば全く普通のことであり平凡な言草であるやうであるが、當時は随分喧ましい議論の繰返された程に唐突な提唱であつた。否久しい圖畫教育の鎖國的倦怠から何人かに依つて叫ばれなくてはならぬ氣運にはあつ

たが、叫ばれて見るとやはり唐突な感がして随分反對もあり誤解もあつたやうである。

すでに以來十年の今日此提唱に對する誤解と誹謗はなほ一部の人の間に絶えな  
いやうである。之等の入々の宣傳は更に全國の家際教育家を迷はしてゐる事實も  
多いのである。

しかし私は山本氏其人の人格に共鳴することが出来る。氏が製作する繪畫を見  
れば無條件で氏の人格が、氏の思想が共鳴される。健全に現代人の心琴に觸れて  
來る。氏の言ふ所を深く聞けば今も尙すべて正しく健全である。氏の目ざす圖書  
教育の理想は全部賛成せざるを得ない。

氏の言ひ表はし方はスツバリしてゐて氣持がよい。それは單なる表現の美では  
ない。思想が健全で信念が正確だからであり、内に深い美しい純情が潤ひ宿され  
てゐるからである。われ／＼は改めて氏が最初に言つた言葉を充分に味つて見な  
くてはならない。

○

普通學に位置する、圖書教育と云ふものは、一體何のためにあるか？實に  
何のためにあるか？私は教育家に出會す度に此問を發した。けれども鮮明に  
答へた人は一人もない。私は勿論、躊躇なく答へやうとする。

「それは美術教育のためだ。それでなかつたら普通學に於ける圖書の教習は  
無意味だ」と。

○

（けれども）美術教育と美術家教育とを混同してはいけない。

○

音樂の教習が音樂家を、理科の教授が理學士を作らうするのでないやうに、  
圖書の教習が美術家を作るのを目的としてゐないことも當然だ。  
だが、其使命が美術教育でないとしたら、一体何だ、——仮りに圖書の教育  
に何か他の使命があるとして、然らば、子供等の美的感銘を何とする。創造

的能力を何とする。人類最高の裝飾とせらるる藝術の味解を何とする。人間の享有する性能の最も著しいものであり、其社會生活に生涯を通じて重要な意義をなすそれ等のもの、開發涵養の役目を普通學の何處で受持たうと云ふのだ。美術教育の組織は普通學におとしではならぬものだ。

科學者は豊富な知識を註文するが、軍人は逞しい体力と正しい勇氣を望むが、私は其上に、彼等自身の自然觀も趣味も有つた、創造的熱情ある人間らしい生徒を送り出して貰ひたいのである。

驚いたのは、地位ある一教育家が、

「何故美術教育が必要なんです！」

「美術教育が人生にどう云ふ價值があるとお仰るのです！」

と質問した事である。私はまごついちまつて「貴君の質問を真似すると、何故德育が必要なんです！道徳が人生にどう云ふ價值があるのです！なんとも云へる事になつちまいますよ」とでも答へるのを氣づかすにしまつた。

衣裳に化粧に宴會に、家具文房具、室内店前の裝飾に、建築、市街、公園、演劇、お祭、展覽會に數へ切れない程の美術的効果が、吾々の社會に普く表現されてゐるのを見ながら、それ等のものを鑑賞享樂し、批評獎勵し創造顯耀する素因たる美術教育の必要を今更疑ふやうな教育家に千萬卷の書によつて理由を講釋しても追つくまい。

○ 繰返し云ふが美術教育でなかつたら、何の爲の圖畫教習だ。

それは物体を正確に寫し能ふやうにする教習で、大人になつてから必要に應じて物の形の描けるやう準備をするのだ——と云ふか。

卿等の信する正確とは、人間の眼に映じた對象の姿ではなくして、生徒の實感を無視した、冷い教授法で抽象された模型だ。

卿等は常に生徒をして物体の模型を作らしめ、又物件を標本的精緻に描寫せしめて圖畫教育の要点を盡したやうに思つてゐる。

處が僕を以つて見れば、それ等の模型と精緻とは圖畫教育の應用的一小部目であつて、むしろそれは理科や植物學の補助學と思ひ度いのだ。一体さうした抽象的正確の造形力や、標本的精緻の描寫力が大人になつてから何時必要なのだ。植物學者や機械工になつた者でそれを必要としたら、其時期に少し習へば出事る事だ。それこそ却つて、普通學に課する不適當な、專問的な畫學である。

○  
圖畫教育の使命は要するに鑑賞教育である——といふか。卿等の云ふ鑑賞とは、例へば土佐派と狩野派の別を知り、帝展と二科風の相異を會得する類であり、以て生徒が大人になつた時期に、觀畫上に分別を備へた人物たらしむるを目的とするものゝやうに聞いて居るが、此教育は小學の過程には勿論有害である。

鑑賞教育の主張者は美術教育を是認する人であらうから、定めし、生徒等の創造的生長を主義として彼等各自が人爲的拘束なき印象、感覺、認識空想に従つて自づから畫因をつかみ、技工を自得する自由畫を獎勵して居るであらうが、萬一さうでなかつたら災ひである。何となれば創造力のない處——個性的感銘と其表現的習性の無い處に、順當な鑑賞力はあり得ないではないか。此斷定に反對する人があるなれば、其人は物知りと鑑賞とを同じ事と思つて居る人だ。

○  
圖畫教育は、つまり美的情操の教育である。感情を豊にし、趣味を高尙にせしめるための教育機關である——と云ふか、勿論私は不賛成しない。併し左様な見解を持つ人々が何故、生徒等の自然觀を閑却し、創造的能力を無視してゐるか？ 常に範を以て臨み、概念を以て制し、權威を以て規定する從來の畫學に、不合理を感じなかつたと云ふのは變である。

眞似することを知つて生むことを知らないもの、概念憂つて實感の萎縮した



者、美術を知つて美を知らない者どもに、なんで美しい情想も高い趣味もあり得やう。

○ 卿等はよく實用々々といふ。併し美術的效果を生命とするあらゆる裝飾、あらゆる手藝、あらゆる創作を外にして、圖畫教育の實用に就ていくばくの物を例を挙げ得るか？實は不幸にして従來の圖畫教育は頗る不實用に計劃されてゐるのである。

美術教育は要するに感情教育だと云ふのはまあいゝ。併し其處に知育はないと思ふのは亂暴だ。ありていに言詮すれば人間の有つてゐるあらゆる性能に滋雨を灌溉するのが美術教育だ、なぜならば子供が一枚の寫生圖を作るに當つて、彼れの智慧も知識も、經驗も、印象も感覺も認識も、齊しく働かざるを得ないではないか。——で其渾一な表現が即ち創造なんだ。

美術教育とは、愛を以て創造を處理する教育である。

○ 美術よりは美、模造よりは創造、夢想よりは感銘、過去よりは現在——

○ 彼れらはすべて、表現の純を知らねばならぬ。誰れ人にも植えつけられてある「創造」の苗が、愛し愛されつゝ生長する事を正しい道德とせねばならぬ。

○ 要するに、私の自由畫教育の主張は、鮮明であると共に簡單だ。

○ 五本の指が五本ながらに釣合の取れた形態で育つて居ねばをかしいやうに、人間生活に其の一本の指を意義する美術上の教育が普通學のうちに培はれなければうそだといふことと、現に普通學に編み込まれてある圖畫科なるものが、もしも美術教育のためでなかつたとしたら不要だと云ふのである。

右は實に山本氏の「自由畫教育說」の骨子をなすところの目的觀であつて、要約された言葉の中に無限の意味を藏してゐることをわれ等はよく味解せねばならぬ。

之は單に一つの圖畫教育說として考へるよりは圖畫教育に恒久性を與へるところの永久不變の目的觀を示すものであると私は考へるのである。今日尙幾多の説をなすものがあるけれども要するところ圖畫教育は美術教育である云ふ見解の外には出でない。美術教育乃至美の教育が一個の人間に取つて本質的に欠いてはならないことは、丁度科學的教科に依つて智的教育を忘れてはならぬと同意味であつて、普通教育が全人教育である以上人間の本質的要求に密着して人として完全圓滿を期する上から、美に向ふ心、創造に憧憬する心の重大な一面に對して、最も縁の深い圖畫教育が其獨自の境地を開展しなければならぬと云ふことは動かすことの出来ない眞實であると私は思ふ。

それを従來の如く目的の第一義を實用乃至實生活上の經濟に置くことは何處までも圖畫教育の眞使命を誤るものであつて、人生生活の重要な一面であるところの美の慾求乃至美の自然的享受の道を普通教育の上に滅却するものであつて、如何程美感の養成など、拔目なく目的の中に數へ上げたところが結局根を絶たれた草であるが故に花が咲くと云ふ道理はないのである。

概念と模型の模倣的追及をいくら精緻に正確にしたところでそれは何處までも概念と模型に過ぎないのであつて、何等工業にも工藝にも新しい生命を吹き込むことの出来る國民的性能を養成することではなく、寧ろ伸びんとする本質的性能を枯渴せしめる以外の何物でもないのである。自然の美に直接眼を開かないやうな教育に依つて美感養成などは思ひもよらぬこと、又眞に生彩のある實用が生れる素質の養成さへもあり得べからざる無謀の計劃と云はねばなるまい。

山本氏の言ふところは尙些か激越の調がないでもないし、且つ誤解を招き易い節々もかなりあると思ふけれども、云つてゐることの精神は皆正しい。之を一々

解釋するのは今は其餘裕がないが、試みに静かな自他なき境地に於て此聲を聞けば確に何人も一々首肯させられるだらうことを信じて疑はない。

x

私は更に最近書家岸田劉生氏の所論を氏の著書「圖畫教育論」に就て見たのであるが、其目的觀に就ては大いに傾聴に價するものがある。氏の所論の要点は普通教育に於ける圖畫教育は德育にあると云ふのである。この主張は氏の藝術境から生れたものであると云ふことであるが、西田幾太郎博士の「藝術と道德」に於て述べられてゐるところの眞、善、美の哲學的解釋に於ける善と美との關係論と其歸を一つにしてわれ等の深く味はねばならぬところである。

岸田氏の云ふ所は約言すれば我國の教育が精神的涵養を輕視し來つたことの不可を痛撃し之を匡救するものは一つに藝術教科であつて先づ圖畫科に其指を屈せねばならぬ。眞に美に參ずることはやがて善に至る道であつて、荒廢したる善の教育即ち德育のためにこそ圖畫科の存在價值があるので、その第一目的は必ずし

も美術や繪を教へることではなく、美術や繪に依つて眞の德育を施さんとする事であると云ひ得る。と云ふのである。

美に働く心と善に働く心とは、心の同じ姿であつて理智の世界とは大分その働き方が違ふのである。勿論眞も善も美も遂にその絶對境に於て合一するものであつて一事に徹することに依つてすべてに通ずるものではあるけれども、普通教育に於ては左様なことは望まれないから、なるべく手近かな方法に依らなければならぬが、人格の中樞であるところの善の教育が從來修身科などで單なる理智に依つて試みられて居たことは甚だしき不合理で、却つて道德をして物質的低級に墜せしめるやうな結果になつて來た。

之は當然の結果であつて、善を培ふに理智を以てしては駄目である。善を養ふは一つに美の教養に依るべし。善惡の感別は美的感情の教育に依つて得るのが最も近道である。依つて圖畫教育は從來は全然知育の一科であつたが今よりは、唯一の德育の機關となつた。と云ふやうな意味である。

歌辯を弄するまでもないが、真に自然の美に向つて開かれたる眼に愛の宿らぬと云ふことがない。美の経験を積み重ねることに依つて愛は益々深きに至り廣きに亘る。美の境地が深ければ一切のもの皆美に輝き渡り、醜はその影をひそめ悪は地上より去る。美は醜を知り美は善に通じ悪を排す。美を求むる心は即ち參善の道である。

岸田氏の所論に間違ひなく圖書科の目的觀に深遠なる一面を開拓して意味深長である。

x

凡そ教育のことは何事に依らず姑息な物の考へ方や一時的な流行に終つてはならない。單なる流行や熱病的な考へに附和雷同するやうでは碌な仕事は出来ない。況て教育の事が社會の不純不健全な要求に支配されて盲目に動くやうなことや、因習的惰性に捉はれて何等の顧慮が拂はれないと云ふやうなことではそこに活力ある仕事は生れて來ない。

何のために、如何なる目的のために今之を爲してゐるかと云ふことが明瞭になつてゐないで爲されてゐることがかなり多いが、根底の無いさう云ふ教育は寧ろ災ひである。

圖書教育は寫生畫でなくてはいけないと云ふ。何故寫生畫でなくてはいけないのか。

皆がしてゐるからさうすると云ふことがかなり多い。こう云ふ世の中だからさう云ふ教育をしなくてはならないと云ふ。無理想、無定見な事が世の中には随分ある。

さう云ふことは獨り教育の上のみを責める譯にも行かないが、われ等は何事によらず、何處から撃つて來られてもたちろがない信念と理想の上で安心立命の仕事をして居り度いものである。

x

私が何よりも先づ最初に考へることは、今日の社會的傾向乃至社會的實生活の

慘虐なる不自然である。そこには世を擧げておほらかな自然兒としての生活の幸恵が殆ど失はれてゐると云ふことである。何處を見ても楽しく愉快な生活と云ふものが次第に影をひそめつゝあるのではないかと云ふことである。

人智が発達して色々な發明や發見があればある程われ／＼の生活は便利になり、物質的の享樂が次第に豊かになることは慥かであらう。又人智の發達に依つて色々な危険、災禍、病氣等の生命的脅威から救ふことも出来るだらう。人智は力により、人智に依つて人間の生活が何處までも擴げられてゆくことは事實である物質文化がどんなにいゝものであり、どんなに大きな利益を人類に齎したか云ふことは、そして更に更に此文化を高潮しなくてはならないかは今更云ふまでもないことである。

しかしよく考へて見ると物質的文化が進み人智が発達すればする程人間は一面不幸になると云はなければならぬ。人智は限りなく發展するだらう。一日もたゆみなく進展するだらう。それ丈けに人間の不幸は加速度を以つて深められると

云はなければならぬ。

食を求めて大陸の大平原を横斷する羚羊の大群の話は私に此處で思ひ出さずには居られない。眞先きに進んで居るものは進むに従つて次々と新しい食物にありつけるけれども、後列にあるものはいつでも空腹ではないか、飢餓に迫られて速力は次第増すけれども後列のものは何處まで行つても同じことである。蹂られるもの餓死するもの、大部分のものはかくて斃死しなければならぬのである。脚の強いもの体力の優れたものだけが残る道理である。

物質的文化の進展は丁度これと同じことである。境遇やいろ／＼な先天に依つてその第一線に進み得るものゝみが受ける幸福であるより外はないのである。羚羊の群が只眞直に前進するやうに、物質文化が人類の唯一事となつてこれにのみ突進し去るならば人類の不幸之より大なるはあるまい。事實今日の社會は確かにこの姿を取つてゐるのではないか。不幸なもの、虐げられた者があまりに多い社會事相は明かにこれを證明してゐるのではないか。富めるもの、貧しきもの、地位

の高きもの、低きものを通じて尙且つ永遠に物質的競争の桎梏より解放せられざるかに見えるのは、何の故であるか。それは畢竟世を擧げて物質の一事より他を顧みやうとしないからではあるまいか。

優勝劣敗と云ふことはダーヴィンが進化論に説明するまでもなく昔の社會にもあつたらうけれど今日のやうにかくまで痛切ではなかつた筈だ。それはまた人類が科學の洗禮を受けず、神が神の恩寵が尙幾何か人類の上に殘されて居つたからであつた筈だ。人類は科學の説明する優勝劣敗と云ふ言葉をあまりにも易々と肯定してしまつた。それは慥かに動物學や植物學に於ける自然の法則であらう。科學者の頭を以つてすれば、觀察を以つてすれば總ての事實は優勝劣敗、自然淘汰の法則を出でないに違ひないのである。しかし植物學や動物學の法則に依つて人類生活のすべてを委し至ることは何處までも間違つてゐる。それは言ふまでもないことでありながら事實は委し至つた人類世相であつた。人の親はわが兒こそ人類進化の第一線に立ち得る優者たらしやうと誰もが翼つた。教師は自分の教へる

子供こそすべて全き優者なれと鞭撻した。子供は成長して益々此自覺を深めて努力した。かくてこの希望の力が更に社會の進運を來したことは何處までも事實であるが、總ての者が優者たることは遂に出來なかつた。そしてそれは永遠に不可能のことであつた。即ちかくて總ての者が幸福であることは出來なかつた。只徒らに競争が激甚になる許りであつた。寧ろ人は其競争が唯一の使命であるかの如く自然から受けた一切であるかの如く、優者は更に優者同志の、劣者は更に劣者仲間の競争に争奪に終始した。そして尙いつまでも止む時はないやうである。その結果は、その當然の世相は、見よ。人情の冷酷、自己本位、排他、狡猾、神經過敏、嫉妬、怨恨、詐妄、あらゆる人間的惡が蔓つてしまつたかの様である。

實に住み心地の悪い世の中である。總て美しいと見える人情の表現さへが醜い下心の人間惡の化粧された綺麗に過ぎないことを何とする。都會は文化の中樞であるが故に人情は紙よりも薄いとされ、田舎は文化の光被に乏しきが故に純朴で

あるとされて居たが、今や都會人も田舎人もこの人情の薄さに何等かはるところはなくなつた。われ等はまた純情を生きると誇つてゐてもそれもやがては世の大勢に嘗めつくされるべき束の間の純情に過ぎないことはないか。

強者たれ、優者たれ、すべての解決は力である。世のせち辛きを思ふもの、世の不合理を思ふものはすべて弱者の輩である。劣者である。只われ等の目標は強者たること、優者たることである。人皆が言ふのである。誠にうか／＼してゐては生きて居られぬ世の中である。しかし、われ／＼は今一步深く考へて見る必要はないか。

失はれたる人間愛、美、失はれたる精神的幸福を何故顧みやうとはしないのか。肉食許りしてゐたのでは病氣になる。物質文化のみの結果は明らかに社會的潰血病を起してゐるではないか。あの野の香りのする新鮮な野菜はどうしたのか。もう魚肉が鼻についてキャベツが欲しくなつてもいゝ時ではないか。

實はこれはひとり私が考へる丈けでなく、世の識者を俟つまでもなく、お互誰

れでももの心の中に氣づいてゐることだらうから、取り立て、言ふ丈け野暮なものかも知れないが、だからと云つてそれが實際にどんな形で現はれてゐるか云へば全く何もないのである。物質的な首枷は益々加つて行くけれど精神的なものは一つも取戻されてゐないのである。

教育に就て考へて見ても最初に言つた通り、何の教科もが物質的であり、智的であり、科學的であつて、それが教育の全部であるやうに考へられてはゐなかつたか。國家經濟の上から、一國の物質文化の上から、一個人の物質的享有の上からすべては計劃され運用されそれに終始されてはゐるではないか。

近來精神的な教育に稍注意されるところがないではないが、尙且つ一個人が社會の物質的落伍者とならざらんがために、智的實用の教育が何處までも過重され、強要されてゐることを否むわけには行かまい。

此意味で圖畫教育もやはり一つの技能教科として智的實用的に計劃され、智能技能の習練として一つに物質の道への役目にのみ考へられて來た。何の學科に就

ても此意味の外ではないやうに私は考へられる。教育がすべてそれである以上いつまで経つてもこの物質的桎梏は同じことである。

こう云ふ教育の眞たゞ中にあつて精神教育に與みするものはないか、こう云ふ片手落ちな教育にいつまでも堪えて居ることは出来ない。この社會的疾風に對する用意も一つに教育の片手落ちを救ふことに依つて果せるのではないか。

圖書教育の立場はその特質からどうしても精神的な教育教科でなくてはならないと私は考へるものである。實にこうした智的偏重の教育にあつてせめて圖書科なりとも精神教育のためにその特質を失はしめたくないと思へるのである。一部の人々の言ふやうに尙實用本位に智能技能の教育を眞向にふりかざすことは決して圖書科の本質をよく理解したものではないのである。

單に智的偏重の教育であるが故に圖書科を精神的教科に直さうと云ふのではない、圖書科の本質が寧ろ決して物質的でなく精神的であるが故にその特質を忘れて去つた智的實用教育としての考へ方を誤りであるとして之を排し、その本質に深

く密着しやうと云ふに外ならないのである。

勿論私は物質的智的教育的排するものではない。却つて更に深く更に高く智育の進展することに依つて社會文化のレベルが上がることは何處までも望ましく思ふものである。いけないのは單にそれのみに偏することである。片手落ちになることである。精神的教育に特質を持つてゐる學科は何處までもその特質を伸ばしてこの片手落ちを救はなければならぬと云ふのである。山本氏の言ふやうに五本の指が五本ながらにそれ〴〵完全に發達してゐなくては決して健全であると云ふことは言へないと言ふのである。

勿論私は圖書科の我用的方面も智育としての方面も知つてゐる。又それが如何に大切であるかも知つてゐる。しかし就最初に忘れてはならない最も大切な精神的特質を強調せねばならないと思ふのである。圖書科の特質、圖書科の精神的特質とは何か。

それは要するところ美である。美の教育である。美の教育を外にして圖書教育



を考へることは出来ない。美の教育を後まはしにして圖畫教育を考へる者は圖畫教育を取扱ふ資格なきものと私は斷ずる。

物質文化が榮えて社會的に惡が蔓り人の心が荒廢するのは、社會から美が失はれるからである。人の心に美が失はれた時残るものは單に醜い獸心のみである。われ／＼は何處までもこの美を取り戻さなくてはならない。人の心に美を高調しなくてはならない。

x

近來藝術教育強調の聲は一段と高くなつて來たやうである。藝術教育の目標は要するところ美である。眞に教育を思ふもの、教育の知育偏重を憂ふるもの、齊しく藝術教育の重要なことを痛感するところとなり、大きな聲となつたことは實に喜ばしい。圖畫や手工や音樂や文學や体操などが藝術的にめざめ美に向つて提携して進むことは眞に智育に偏重した教育を救ふ道であり、社會的荒廢を取戻す道である。

圖畫科がこの藝術教科の第一線に立つて其存分な特質の發揮に力めなくてはならないのは、極めて明白でそれが唯一の立場でなくてはならないのである。

x

幾度も繰返すが圖畫教育は美術教育だ。美の教育だ。美育と云ふ言葉が近頃出來たが簡明でない。

美育と云ふことをも少し具体的に言へば、智育、德育、体育などに對して美育があるを考へれば明瞭になつて來るだらう。又さう云ふ風に教育の分野を考へる時にどうしてもなくてはならぬ一つであることも首肯出來るだらう。

要するに感情の教育である。情操の教育である。先づわれ／＼をめぐる自然に就て見るならば、一木一石、一枝の花にも、一枚の草の葉にも、一匹の虫にも、鳥や獸、山や野原、澄み渡る大空、浮ぶ雲、家のたゞまみや道行く人、どんな小さな自然の一片にも、又大きな風景の中にも變化極まりない自然現象の中にもあらゆるさうした自然物象の中にある／＼な心の姿に於て心引かれないと云ふこと

はない。

さう云ふ自然の種々相と心から氣息を合することの喜びはわれ／＼自然兒が持つ本質的な歡に外ならない。さう云ふ氣息の合一が美の境地であつて、そこに人類の詩が生れ、音樂が繪畫が生れるのである。それは實に原始の昔から、人類と共に終始する自然兒の氣息である。

人はさうして生甲斐を感じ、生きる歡を味ひ、勇氣づけられ、慰められ、清められ高められて行くのである。こうして心は常に健康を保つて來たのである。さう云ふ境地に居ることほ人間本來の要求であつた。見よ子供等のさうした自然兒の美的感銘が如何に彼等にとつて大切であるかを。如何に切實であるかを。只物質的苦惱に盲目された今日の大人のみがこの人間本來の境地をよそにして不健全に生きなければならぬかに見えるではないか。それは決して人間としての本當の姿ではあるまい。この境地を何を措いても人の心に取り戻し、おほらかな、満ち足つた、豊かな健康な、自然兒の心持ちを、即ち美の境地を、人の心に、自然に

見開く瞳から培ひ育てることが美育の第一義である。

これを忘れて目前の實利、實用に走るやうな圖畫教育は、小さな人智の思ひ付きの中に涸渇し乾燥し、折角の自然的ないゝ芽生を萎縮させてしまふ結果になるのである。

更に人工の世界を見るならば其處には衣食住となく、あらゆる生活上の裝飾が如何なる些末なる物の中にも表現され、われ／＼を圍繞してゐるではないか。着てゐる着物にも、帽子にも、食器にも、いろんな家具調度、室内の裝飾にも、庭の作りにも、神社、佛寺、市街、公園、劇場、或はお祭、節句のいろ／＼な催や、四季それ／＼の營みの中にも、其處に人間としての美的なあらゆる表現があるではないか。さう云ふものを鑑賞し味解し、享樂する境地が人の心から失はれぬことは、又さう云ふ營みや習俗のいゝものを一遍の實利のために失はぬやうに力めることは、人世を更により美しく、より高いものにして行かうとする心持こそは、社會を殺伐にせず、冷やかにせず、貧寒にせず、滋ひと暖か味を與へるものである。

まことにさう云ふ眼差の人々を以て満される社會は平和であり愛である。

美育は又さう云ふ意味に考へられなくてはならない。其處にはひからびた効利一遍の實用でなしに眞に生きた實用が創造され、滋ひのある味ひの深い裝飾や實用が生みなされると云はなければならぬ。

又美育の境地は、幾多の過去から現在へかけての藝術家に依つて生み出された藝術作品の鑑賞、享受が大きな一面である。それは決してさう云ふ作品の鑑別や考證の物識りを教育する意味ではない。われ／＼が自然に向ふ純真さに於て藝術作品の種々相に觸れて受ける美的感銘が、如何に人間の心持ちを高雅にし、豊饒にするかと云ふことは今更言ふまでもないことで、折角さうしたよき藝術を持ちながら、それをほんとうに享受することが出来ないこと云ふことは不幸である。それは單なる一時的の享樂ではなく深い教養を人の上に築くものであるからである。更に美育の境地は創造の境地である。さう云ふあらゆる美的感銘がわれ等の心を驅つて常に創造表現の世界に導くことは人間本來の性能である。そこに専心な

る創作的純情が燃え、われ等ながらの藝術創造の三昧境がある。

感銘は更に深められ次第に自他なき純眞の境地に入つて全人的なあらゆる綜合活動が己れ自らを一切空の淨地に導き入れるのである。表現された作品に眞の己の姿を見、眞に己を知り、己に働く愛は健全となるのである。この世界は實に人間の神秘境であり、聖地である。ひとり藝術創造のみならず、すべてに對して個性的獨創の人となり創造的活動人としての姿は養はれるのである。これは全く美育の至境であるとも言へるのである。

x

又さう云ふことはひとり美育のみに限つたことではないが、殊に美育で切實に思ふことは、物に向つた人間の態度、仕事をするときの心構え、仕事を進めて行く際の機略と云つたやうなことである。圖畫教室は道場のやうなものである。筆を取つて畫紙に向ひ、モデルに正觀するのは、劍を取つて敵手に向ふ心である。それは大人にとつても子供にとつても同じことである。勿論子供は子供らしい素

因による子供らしい眞剣さであるが、物に向つて見開かれたる眼に寸分の隙がなく、心底に亂れざる統一の力がこもると云ふことは子供ながらに自ら備つて然るべき境地、凡そ繪のことは浮いた冗談半分の戯れではない。

美に通ふも通はざるもこの構へ一つにある。これ子供ながらの禪機である。氣魄の生れるところ、純真無染の境である。

やさしいと思ひ、樂しと思ひ、愛らしと思ひ、悲しと思ひ、勇壯なと思ひ、朗らかと思ひ、沈鬱なと思ひ、柔かいと思ひ、堅いと思ひ、赤いと思ひ、白いと思ふ。さう云ふ感覺認識が渾然として生動せる情緒にふれる。およそ萬有と共に心自ら至るはこの構へ一つである。藝術に於ける第一の要諦であつて、又すべてに對する人間の態度であらう。

すべての表現の正鴻と、確さと、深さはそこから生れて来る。計劃が生れ、仕事が生きて働く。仕事の一つ／＼肯綮に中り、建業が一つ／＼に繋り、機に觸れて當意即妙、變に應じて變に處し、緩急その當に中る、と云つたやうな妙境は美育

に依つて養はれることが、美育の本質として餘程多いと思ふ。之は全人的性能の問題であるけれども美育の形式的方面と云つていゝか、兎に角目的觀の上に忘れてはならぬ重大な一面である。

子供を甘やかし育てるハイカラな教育ではさう云ふことを一向考へてゐないやうであるが、美育美育と云つて甘つたるい柔弱な教育だと思つたら大間違ひである。子供が嬉々として立ち向ふことは、子供の心がゆるみなく張り切つてゐる状態である、甘やかしたり、放縱にすることは決してない。

私は美育とはかくの如きものであると思つてゐる。この道を目ざして進めば圖畫教育は健全なる目的の上に立つと私は考へてゐる。

この境地に於ては實用と云ふやうなことも眞に生きて來ると思ふ、智的、物質的無味乾燥な實用と云ふものは決して人間本來の要求に生きて居ないのであつて、それは全くこうした社會の間に合せに過ぎないのである。先づわれ／＼は、常にわれ／＼の要求に生きて結合された實用を忘れないために、美に専心しなく

てはならない。自然兒としての心に叶ふものでなくてはならない。そこに眞の實用がある。當然生きた實用が生れて来る。工藝、工業のよりよき素質が國民の中に芽生えることを信じて疑はない。

また美育に於ける美の境地はかくて圖畫教育に動かない定義を與へたが、こう云ふ心持ち、こう云ふ姿は要するところ人々の心に愛を培ふ道理である。

岸田氏の所謂善の教育は自らにして爲されることになる。即ち德育に結合して考へても差支ない譯になるのである。しかし岸田氏の言ふ如く最初から德育を目ざして進むことは圖畫教育の本義ではないことを私は考へる。

つまり圖畫教育は結局德育であると云ふことは言へるにしても、美を透して善に滲透するのであつて、世界はどこでも美の世界である。片手落な智育偏重の教育の恐るべき弊害や、物質文化的社會の荒涼に根本的な救済の力となるものであると云ふことは、深く圖畫教育の思を潜むべきところであるが、美を忘れ去つて圖畫教育はないのである。

x

圖畫教育が美育であると云ふことを云ひ度いために大變冗長になつた。美育としての圖畫教育の意味が定まり、目的觀が確立したから愈々此目的を完全に果すために、充分であり、且つ正鴻なる方法を確立しなければならぬ。

元來「美」と云ふことは神韻漂渺として捕捉し難い正体であるから、よほど心してかゝらなければならぬ。所謂藝術教科の指導方法を誤り易いのは此「美」の意味をはつきりさせないところから起るやうである。「美」に就ては次の項に於て今少し述べることにする。

本質的な諸問題

## 一、美とは？

圖書教育は要するに美育であると云ふことは目的論で述べた。美育とはどう云ふことであるかに就ても大体云つたつもりである。

美育の本体である美。美とは何であるか。美とはどう云ふことであるか。

だが美とはこう云ふものであると云ふことは、簡単な言葉では逆も云へない。どう云ふ風に云ひまはして見ても云ひおほせるものではあるまいと思ふ。

只われ／＼が「これは美しい。」と、感嘆するやうな時にわれ／＼は美を経験してゐるのである。丁度「これはおいしい。」と、云ふ時われ／＼は美味を味はつてゐるのであるが、單にそれが甘いからとか、辛いからとか云ふのではなく、どう云つていゝかわからないいろ／＼な味の調和が味覺を魅魔することを云ふので、こう云ふものがおいしいのだと云ふことは逆も言へるものでない。美はやはりそれで、「これは美しい」と云つたところで、そしたらその美しい本体は何かと云ふことになる。之であるとはつきり掴み出して云ふわけには行かないのであ

る。  
味にもいろ／＼な味がある。物それ／＼に特有な味を有つ。おいしいとかまづいとか云つたところで、人々に依つて一概に言へたものではないので、或人はまづいと思ふものを或人は實においしいと云つて舌鼓を打つやうなもので、何が何だかさつぱりわからない。

美と云ふものもさう云ふえたいの知れないものだと思へば、大体間違ひはない。

美にもいろ／＼な美があつて單に奇麗なとか、可愛い／＼とか云ふ許りでなく、雄大であるとか豪壯だとか、精妙な美しさもあれば粗大な美しさもある。華麗な美もあれば枯淡な美もある。ネグリヂユアーとか、グロテスクの美と云ふやうなことになるば愈々美と云ふものは簡單でない。人間のいろ／＼な感情に伴つて、變化極りない美の種々相があるのである。さう云ふ美の修練をだん／＼積んでゆく幅が廣い許りでなく奥行きは又果しがたい。

原始人や野蠻人の知つてゐる美しさから文明人の持つ美しさ、さては偉大な藝術家の到達した美の世界と云ふことになる限りはないのである。偉大な藝術家になると普通の人間から見ると逆もわからないやうな高い美の世界を持つてゐるけれども、自分では自分の持つてゐる美なんかまだ／＼低いつまらないものだと思つてゐるかも知れない。で全く美とはさう云ふものであると限定してしまふことは要するに出来ないことになる。

只さう云ふことは言へる。例へば美術に就て考へるならば、自然なり美術品なりを対象として、美を経験すると云ふのは、自然なり美術品なりの持つ生命、つまりそのものを形成しそのものを統制してゐる所の力、そのものを個性づけてゐる力、と、これを観る人の生命、その人を形成しその人を統制してゐる所の力、即ちその人の人格とが結合して、こゝに自他なき境地が生れる。つまりその人が自己の精神を対象の中に托し去つて、その中に己を發見する有様を美の経験と云ふのである。その時にわれ／＼は対象の美に觸れたと云ふのである。生命と生命の合



一、さう云ふ合一を可能ならしめる己に叶ふ對象が持つところの生命を美と云ふのである。それを具体的に表現したものが美術品である。藝術作品である。その美術品に依つて人々は更にその美に觸れるのである。

だから美術品は要するに其人の人格の表現で、物に托したその人の人格の表現である。それだから一概に美とはさう云ふものであると具体的に決定してしまふことは美の世界を塞ぐことであつて、美を明かにすることではない。

われ／＼は狭い美の世界から廣い美の世界へ、低い美から次第に高い美へ、と發展するのであるが、その發展に依つて人は大きくなり、高くなり、その大きさと高さに依つて更に廣い、高い美へと發展してゆくのである。

人格と云ふことや生命と云ふことが具体的なものでないやうに、美と云ふものも具体的なものではない。生命と生命の結合と云ふけれども、又人格の表現であると云ふけれども、此場合すべては感情の世界に集中されるそれであつて、こうした美の經驗に依つて健全に感情が培はれ高尚にされて行くのである。

## 二、個性と天分

われ／＼人間はこうして自然の懷に生れて来て、自然のいろ／＼な恩恵に浴して生活してゐるが、自然の中に美を發見し經驗することに依つて、慰められ、力づけられ、且つ高められることは人間としての大きな喜びであり、誇りでなくてはならぬ。それは全く自ら備はる人間の天分である。われ／＼はこの天分を完全に發揮することが美育の本義であると云ふことを言つて来た。

ところが人々に依つてこの天分に種々相があり、強弱があることは事實争はれない。それは長い間の各種の境遇や經驗に依る進化が遺傳されて現れた種々相である。さう云ふ天分の種々相が個人個人に現れたものを個性と云ふのであつて、すべての教育がこの個性を重んじなくてはならないと喧しく言はれるのは道理である。

しかし繰返して云ふやうに、普通教育は全人的の教育であつて、人間の各方面が夫々に健康に發達するやうに教育されなくてはならないので、例へば此子供は

美育にはどうも個性として、先天的に駄目だから、それはいゝ加減にして数理の頭があるのだからその方へうんと伸ばさうと云ふ考へ方は面白くない。個性に注意し個性に即すると云ふのは、勿論長所は大いに伸ばすべきであるが、その短所に對して、より以上の努力が拂はれなければ嘘であると思ふ。

何と云つても美に向ふ心は個性とか何とか云ふ前に、先づ人間の誰もが與へられた大切な天分である。この大切な天分を誰一人として粗末にしてはならないことは、智識に向ふ人間の天分を何人も粗末にしてはならないと同じことである。個性尊重と云ふ言葉に先廻りして先づ人として與へられた天分を忘れ去つてはならない。それは決して健全な人間に教育する道ではないのである。

「どうも此子は個性的に繪の方は駄目です」など、よく平氣で言ふ先生に出會すが、「繪はまづいけれども算術は素晴らしいです」と得意につけ加へられる時に、私はどうしてもわからない。

「此子供は繪はうまいけれど、算術はからつきし駄目です」と苦しきうに云

ふ先生はあつても、「此子供は算術はどうもよく出来なくて困りますが、繪は大變うまいです」と誇らかに云ふ先生はあまりないやうである。

算術が人間として大變大事であるやうに、圖書も亦大變大事なのではないか。それは普遍的に與へられた吾々の天分である。個性であると思ふ前に先づ天分であることを考へなくてはいけない。

さて美育に於て天分乃至個性に就て考へなくてはならない二方面がある。一つは美育的な天分を充分備へてよく伸びる子供と、一つはよほど薄弱で一向伸びない子供とである。そこに先天的の差異があることはどうしても争へないけれども、伸びる子供にはどこまでも伸してやるに何の不都合はないとしても、伸びない子供に天分がないのだからと思つてあきらめてしまつては誠に可哀さうである。普通の子供である以上はどんな子供でも一通り美の味解は出来るものである。誰でも相當の高い所へは努力次第で皆行けるのである。

尋一や尋二の時は誰でも皆繪が好きであつたのだ。そしてみな繪の天才であつ

たのだ。純真な美意識は誰でもみんな持ち合はしてゐたのだ。それをいろんな不自然な教育に依つて隠してしまふからいけないのだ。いゝ繪の先生が受持つと直にみんな立派な繪が描け出すではないか。天分がないと云ふことは決してないのだ。強弱はあつても、大切な天分を粗末にする理由にはならない。

若し優等生などで智的な頭惱に優れてゐると云ふことに依つて、美意識は恵まれてゐない等と考へるならば大變な間違ひと云はなければならぬ。

次には個性に依つて美の感銘に種々相があると云ふことである。勿論人間には夫々個性があると同時に通性があるので、普通の人が美と感ずるところに無暗に反對のあるわけではないのであるが、だからと云つて美育が劃一的に行はれていゝと云ふことは言へないのである。甲に最も美と感ぜられるものでもそれは必ずしも乙の最上ではない。この場合乙は甲の美を美と感ぜないわけではないが、彼によつて最も大切なものは他にあるかも知れないのである。寧ろ他にある場合が多いのである。個が個として夫々思ふ存分美の呼吸をするのは必ず個の自由な世界に

於てゝある。

眞理と云ふやうな理智の世界に於ては個性の自由な世界と云ふものはない。E+Sをもであると思つてもSであると思つてもいゝと云ふことはない。しかし感情の世界ではさうは行かない。さう行く位なら美育なんて誠に世話はないので、新定書帖なんか美の寶典として永久に生命があるのだが。さう行かない所に新定書帳の根本的誤謬があるのであるまいか。

通性と云ふものは美の世界に於ても個と個とを連絡するものであつて、何處までも大切なものであるし、重んじなくてはならない。この通性と云ふ基礎の上に個性があるので通性を全く無視した個性と云ふものは生存することが出来ない。

通性は横に水平に廣がる地盤である。其處に個性が根を下すのである、養分を地盤から吸収して個性は次第に成長する。この成長する個性は夫々の實を結んで地盤に返し地盤を次第に大きく深くして行くのである。そこに人類の發展があるのである。ところが、從來の圖書教育ではこの地盤許りであつていつまで經つて

も個性が認められず、進歩發展、成長と云ふことがなかつた。

通性許りでは其處に何等の生彩も、發動も、成長もない。個性が夫々にいゝものを通性に供給すると云ふことがない。新定畫帖の教育はそれである。

しかし個性許り偏重せられて通性を忘れると云ふことは何處までも間違ひである。

個性に立脚する教育と云ふことも此間の消息を忘れてしまつて、直に枯死するやうなことではいけない。今日個性尊重のあまり、さう云ふことに陥りかゝてゐるのではないか。よくわれ／＼は反省して見る必要がある。

又個性を傷けまいとして随分些細なことが問題になるやうであるが、個性とは決してそんな薄弱なものではない。いくら子供でも個性は踏まれても踏まれても尙且つ伸び出す力を持つてゐるものである。さう云ふ強い力を持つてゐるものが個性であつて、ちよつとしたことで直ぐぐらつくやうな性癖のやうもものを個性だと思つてゐるのは大きな間違ひである。個性とは決して見え易い所に浮動して

ゐるやうなものではない。もつと深い所に隠然たる根を張つてゐるものである。

われ／＼が小さな自分の内容に依つて個性の種々相を容れることが出來ず、淺薄皮相な考へに盲目にされて、折角いゝ個性が夫々の美に就かうとすることに無關心であつたり、防げたりすることのないやうに、われ／＼自身の美の成長に常に心掛けて居なければならぬ。

### 三、美の感銘と表現——表現の技巧

一つの對象に向つても大人は大人としての美の感銘があり、子供は子供としての美の感銘があつて夫々違ふやうに、個性は個性で夫々違つた色彩の感銘がある。或は又美に對する用意即ちその人の持つ人格の力の深淺大小さては高雅野卑に依つて夫々感銘は異なるのである。その感銘の種々相に依つて表現の種々相が生ずる。人は其の感銘を表現しやうとして最も適切な方法手段を要望する。

最も適切な方法手段はそれ等個々の感銘に取つて夫々唯一つづ／＼しかないこと云

ふことが出来る。つまり嚴密な意味で云ふと表現の手段と云ふものはその人に取つて其場合唯一しかないと云へる。だから此處に一つの普遍的な方法手段と云ふものがあつて、つまり或一律な技巧に依つていろ／＼な個性の持つ美の感銘を一律に表現させやうとすることは特殊の場合でない限り間違つた話である。よく樹木の描方であるとか、人物の描方であるとか云ふやうな概念的な技巧を示して寫生をやらせると云ふやうなことがあるが、あれは美の感銘を切實に表現しやうとする妨げとなる許りでなく、さう云ふやり方を度重ねて行くと美に對する心までがさう云ふ技巧の僕となつて、豊厚な自然の美が彼の眼界から扉をしめてしまふと云ふ結果になるのである。

南畫等の中にちやんといろ／＼な物の描方と云ふものがあつて構想の上でそのものゝ取合せを行ふやうなことがあるが、思想畫としてからが己に生命のない概念の遊戯に終るので、さう云ふことは末流のやることに極つてゐるのである。

表現の技巧は必ず切實な美の實感がらしみ出して來るものである。殊に子供の

個性に咲く美の實感新鮮で純真で生一本な強さに輝いてゐるもの、そこに常にわれ／＼が見るやうに大膽で卒直な信じ切つた表現がある。その技巧は實に神來のものであつて、一切の理窟を待たない程敏速に生動して來るのである。此の實感と表現法の密着は實に尊むべき限りであつて、何處までも擁護せねばならぬところである。

單純な美の感銘表現に於ける稚拙な表現の技巧から、次第に複雑微妙なる實感の、洗練されたる技巧への進展には、其處に技巧修得の作爲がなくてはならぬことは決して否定しないけれども、常に切實なる實感の口に投入られる切實なる作爲でなくてはならない筈であつて、先づ技巧を得て自然を尺度すると云ふやり方は、いつでも自然の正しき姿の認識を塞ぎ、概念化されたる硬化に陥ることと言ふまでもないことである。しかしさう云ふ教育の方法が、過去の失敗に性懲りもなく今尙憂つてゐることを残念に思ふものである。

われ等は要するに美の實感を個性的の純真さ、新鮮さ、切實さに生かすことを

考へることに急でなくてはならない。其處に必然に生れて來るものは熱烈な燃ゆるが如き表現慾である。其燃ゆるが如き表現慾は一切の教養を傾中せしめて、最も切實なる手段、即ち技巧を神來すること疑ひなきところである。若し其際技巧に於て行詰ることがあつても適切なる技巧を暗示すれば、それは決して實感を阻害することなく、完全に消化され燃焼し盡さるべきものであると信ずる。

しかし技巧と云つても繪の通性を支配する一般的な方法技巧をまで遠慮して授けるなど云ふのではない。例へば鉛筆畫に於ける一般的な技法、水彩畫に於ける一般的な技法と云つたやうなもの、色彩に關する普遍的な法則、さては圖案に於ける約束と云つたやうなこと、即ち繪をつくりなす上の常識は決して其れが個性の感銘を束縛し概念化するものではないのだから、さう云ふことまで無暗に遠慮する必要はないと思ふのである。

しかしそれとても程度の問題であつて、あまりに立入り過ぎると個性の實感に束縛を與へることになる。例へば水彩畫だからと云つて、必ずさう描くべきもの、

繪具をかくの如く驅使すべきものと云ふ規則はないのであつて、實感に忠實であるためには如何なる驅使法が生れて來るかわからないのであるから、その境界には餘程注意を要する。この間の消息に就ては指導の項に譲らうと思ふけれども、要するにこゝのけじめを知ることがは教師其人の自らの經驗と教養に俟つ外は、容易に説明し盡さるべきことではないのである。

只眞た個性の實感を一切表現の根本に置き、之をどこまでも尊重する人々にして熱誠なる指導者ならば時に多少切り込み過ぎたとしても決して害を及ぼすものではないことを私は信ずる。

とまれ此處に最も大切な美の感銘を深め切實ならしめる道は何であるか。それは要するに純眞なる己に立ち返ることの一途あるのみである。對象に向つて一切の概念的な色眼鏡を捨て去ることである。

兒童は未だ概念蔓らず、未だ汚されざるが故に兒童の實感には常に概して正しく切實である。花をありのままの花として見、山をありのままの姿に於て見、一個

のコップ、一本の瓶と雖も常に純真の己に立ち返つて之を眺むれば自ら氣魄生動し來り、不思議なる生命の力と云ふやうな感懐を呼び起さずには居ないのである。よく天の橋立の股のぞきと云ふことを言ふが、あれは要するに天の橋立に限つたことではないので、何でも股からのぞくと美しく見えるものである。つまり物が反對になつて見えるために、今までの概念がむすびつく暇なく概念をふるひ落す手段が成功して自分が純真に立ち返るからである。壺坂の澤市も始めて眼が開いた時はさぞ世の中が美しく見えたことだらう。

要するにいろ／＼な教養や経験が美の實感にも手傳はずに居ると云ふことはないけれども、あはてた心で物を見ないで深く澄み切つた心になり、静かな然かも深い心の底につながる瞳を見開いてマヂ／＼と物を見る習慣をつけることが第一である。さう云ふ眼で物を見る時に其處に物の姿が生命を帯びて現はれ來り、美の感銘を起さぬと云ふ道理はない。

いけないのはいゝ加減に物を見ること、粗末な智識を振りまはして物を見るこ

と、只上べ許りの部分的な形象に部分的な抜目のない注意を拂つて能事足れりと考へることである。

個性の大きな型として美の感銘には二つの相がある。皮相の形象を通り越して直に物の生命に觸れてしまふやうな行き方と、物の形象的な統一の力から生命を固く把持し得るやうな行き方とである。随つてその表現の型は自ら二途に分れるであらう。一つは東洋的な寫意の行き方である。

更に此二つの中に千差萬態の個性が分れる。われ／＼は常にこのあらゆる感銘と表現の型に同感を持ち得るやう、常に彼等兒童に純真な瞳を要求せねばならぬことこの感を切實にする。

#### 四、創造と模倣

一方へ傾き過ぎると必ず反動が來る。新定書帖時代の一切模倣の教育の反動として、自由畫の説が絶對創造の主張を敢えてしたことはわれ等のよく知るところ

である。ところがそれに依つて圖畫教育では創造と模倣とが常に正反對のことであつて、お互に相容れざる二つであるかの如く多くの人々の腦裡に烙印せられたことも事實である。

如何なる場合と雖も模倣は創造に取つて有害のものと考へられ、模倣の意識に取つては創造への道がないものと考へられてしまつたときへ思はれる節が到る所でその例を作つてゐる。

今日の圖畫教育は只ひた押しに創造へ創造へと推し進められてゐるものであつて、無論私は此心意氣は何處までも賛成で、美育の立場として何處までも正道であることを信じて疑はない。其處に逡巡がなく、停滯がなく、一路發見へ、收穫へ、蓄積へ、成長へと、勇氣と希望に燃えて押し切つて行く姿はまことに頼母しいと思ふ。

しかし——だがよく考へて見なくてはならない。創造と模倣とは相容れざる兩端であるか？おおよそ創造に絶対的の創造と云ふものがあり得るか？之と同じやう

に絶対に自己を去つた模倣と云ふものがあり得るか？それは何んな場合の表現の中にも此両面が常に働いてゐると考へぬわけには行かないのである。

創造と模倣とは要するに表現に於ける二つの傾向として見るべきであると思ふ。著しく創造的な表現と、著しく模倣な表現と——こう考へて見ればよいのではないか。

こゝで更に個性と通性に結びつければ益々明瞭になつて來るであらう。通性の地盤の上に個性が成長する。個性が眞に成長し成果するためにはどうしても地盤から有能な養分を吸収せねばならぬ。地盤から根を絶つた個性と云ふものはどこまでも枯死すべき運命にある。

個性は創造の主体である。眞の創造が生きるのは主体なる個性が潑瀾と働くことである。個性が生きて働くためには地盤なる通性にしつかりと結びついてゐることである。それは何であるか即ち模倣である。

兎に角文化史を讀んでも美術史を讀んでも、この間の消息は過去の事實が歴史



の上で明瞭に示されてゐて今更云ふまでもないことである。山本氏が言ふところの、児童を一切の傳統、一切の模倣から解放せよと云ふ言葉を文字の通りに解釋することは出来ない。あれはあの時の掛け引である。

未來派の連中などの言ふことを聞くと、すべて地上の古きものを焼き拂へ、博物館をぶちこはせ、歴史の本を燃してしまへなどと恐ろしいことを言ふには言ふが、それも一つの掛け引きである。

兎に角ほんとうのよき創造には、その血となり、肉となるべき食物を單に未発見の世界にのみ求むる許りでなく、模倣に依つて先輩やお互同志の中からも得られなくてはならないと云ふことを知る。

模倣は創造と共に大切な人間の本能であることは、その何れも忘れてはならないことを意味してゐる。しかし模倣は創造への手段である。創造を生かすための模倣であると私は固く信じてゐる。

過去の教育はあまりに模倣丈けであり過ぎた。その中で小さく意識されずに盡

く創造性のみでしかなかつた。しかし今やわれ等は眞向にこの創造を振り醫して進むことを美育の本旨とする。

そして單なる模倣に終らないところの創造に生きて結ばれたる模倣の意識を充分にした。個性が自由に選擇すると云ふ意味に於ける模倣は完全に生かされる筈である。其處に二つのものゝ調和が必然に生れる。

とまれ今日の教育教科はあまりにも模倣がすべてであるかの如く、人間的な生氣をあまりにも窒息せしめつゝあるではないか。

せめて美育に於ては更に人間の創造性の復活のために「創造」の絶叫を続けねばなるまい。しかも眞の創造に於ける模倣の眞の活用を實行しつゝ……。

前節にも述べたが、こゝで最後に私の特に言ひ度いことは、模倣性の運用上、あまり創造に接近しすぎることには決して模倣性のよき活用でないこと云ふことである。

例へば一つの創作をさせる時に、それに密着した模範をあまりに直接に見せ過

ざることである。さう云ふ模範は少い例外を除いて多く児童のうちの或少数の個性に利益することは時にあつても、大部分の個性は常によりき創造を生むの道を塞がれることに終るであらう。所謂模倣的傾向の著しい結果に終るであらう。

模倣はもつと飛びはなれたところで、児童の隠然たる教養を平素に培ふと云ふやうな態度に於て活用せられて居なくてはならない。つまりいろいろな模範が個性に結合されて美意識乃至美の理想の上に教養を致すと云つたことでなくてはならない。

美育上の一つのわかり易い例を挙げるならば、林檎の寫生をすることとして、林檎をかいた繪を二三枚持つて來てそれを參考として、それをいろいろ研究してきて實際的林檎に向ふと云ふやり方も、やり様に依つては決して悪いことはないが、さう云ふやり方よりも、圖畫教室などへ平素いろいろない、繪を澤山かけならべて置いて、始終それをよく見させ、個人個人が特に自分にびつたり來る夫々幾つかのいゝ感銘に依つてだん／＼培はれた感化が、あまり直接筆法でない、實感を

塞がない模倣に淳化されて、始めて林檎の寫生の場合に現れて來ると云ふやうな模倣であつて欲しいと思ふのである。

創造には何處までも實感を蔽ふては駄目である。前の場合に示される幾枚かの模範的林檎の繪は今彼等が寫生しやうとする林檎とは全く別種のモチイブであつたことを深く考へて見なくてはならない。それはモチイブが違ふと云ふ意味に於て、林檎をかいたのではない他の風景畫や、人物畫と何等異るところはないのであつて、今そこにある林檎から受ける實感に取つては無意味である許りでなく偶々林檎の繪であつたと云ふことに依つて児童を迷盲せしめて、却つて實感を不純にしてしまふ許りである。たとへそれが彼等の製作の激勵になり得たとしても出發点なる實感を不純にする爲に激勵も價値のないものになつてしまふ。

さて又この意味の更に擴張された、あまり児童にまで引き下げて考へられたやうな模範、複製、作品などのみ見せることは、彼等の理解の程度と云ふ從來の教育の一つの概念に依つて、抜かれない妄執のやうになつてゐると私は思ふが、之

が多くの場合いけない結果を生むのである。

子供は子供ながらの生活があり要求があり認識實感を持つてゐるし、それを何處までも尊重しそれに即して教育が行はれなかつたならば、教育は兒童から背反するものであると云ふことも充分承知してゐるのであるが、子供が玩具の人形を作るからと云つて子供の作つた人形のやうな人間が實際に居るわけではない。子供はさう云ふ認識をし、さう云ふ風な實感を持つてゐるのであるし、さう云ふ人形を單に作る。と云ふことを好むのである。自然は何處までも完全に莊重で深く高いのである。さう云ふ自然の中で子供はさう云ふ風に生きてゐるのである。それさへよく心得てゐて子供はどう見てゐるかといふことをよく知つてゐればいゝのだし、注意してゐればいゝのである。それをわざ／＼自然を子供の實感通りに直して見ると云ふ必要もなく、又出来もしないのである。それ所でなくどんな深い自然の中にも子供は子供らしい實感を生かしてゐるのである。

子供に見せる繪だつてその通りだ。下らないものはなるべく見せないこと、無

理に子供に媚びたやうなものは却つて卑しくていけない。さう云ふことがよくあつて困るのだが、早く醒めないものか。

子供に見せるものは第一流の繪をなるべく見せよ。それが第一だと私は常に考へてゐる。なるべく高くいゝ美術を見せよ、それが何よりもよき模倣を生むのだ。第一流の美術品だからとて必ずしも複雑を極めたものとは限るまい。複雑を極めたものだつてちつとも差支ないのである。見よ自然の如何に複雑であるかを。子供は平氣でその中に彼等の實感を生かしてゐるではないか。兎に角薄つべらでない生命の漲つたよき美術の中に彼等の模倣を生かさなくてはならないと云ふことを附言して置き度い。

### 五、自由とは？

山本氏に依つて提唱された自由畫の自由が、氏の言ふ精神を汲まずに、只言葉の上で放縱とか放任、無目的、と云ふやうな意味に誤解されてけなされたり、結

果としてさうなるやうに輕卒であつたりして、圖畫教育を救ひ難い状態に一時陥れたことは自由畫提唱當時の實情であつたと思ふ。實を云ふと今も尙この自由と云ふことが正當に解釋されてゐないことがかなりあるやうに思はれてならない。自由などと云ふことは教育が作爲である以上問題にするだけどうかしてゐると、今でも頭から考へて居る人があつて、自由と云ふやうな言葉を使ふと直に侮蔑的な眼をむける人があるが、自由畫の自由を忽ち誤解し去つたこと、云ひ、自由と云ふことに就て一向無關心であること、云ひ、或は反對に自由を恐れさへすること、云ひ、どうも日本人には先天的に自由などと云ふものは不必要のことなのかしら。

劃一的な模型を定めてそれに結びつけてしまふことは「不自由な教育」であるとして山本氏が喝破するまでもなく自由を無視するものであつた。少しも手を下さないで放任することは個性の芽を侵さないとは言へるであらうが、成長を顧みないと云ふ意味に於て教育ではあるまい。夫々の個性が侵害されずその特質を遺

憾なく發揮出来るやうに、個性に密着した教育的方案を以つて導くことが眞に自由の教育であると信ずるものである。

美はいつの世でも自由の畑でなくては成長しなかつた。何か他に美を束縛するものがあるときに、美はいつでも枯死してゐる。それは美術の歴史が語る所である。それは人間本然の美の欲求が何か他の目的のために塞がれた時は常に美術の類廢期であり沈滯期であり、美は第二義に落ちるのである。そしてそれは常に人間としての個性が作者、乃至は時代精神から奪はれた時である。個性の甦り、個性の潑瀾たる所に必ず美が生れる。個性は自由の天地に於てのみ潑瀾たり得る。然も放縱ならざる自由の天地に於て。

このことは美育に於ても同じことである。自由のない所に美育はあり得ない。繰り返して云ふ。放縱ならざる眞の自由に於て。——われ等は美育に自由の天地を與へるために、眞に夫々の個性をその夫々の世界に生かさなければならぬが故に、仕事は益々忙しくなると云はねばならない。なまけてゐては逆も自由な美

育は施すに由がない。

### 六、指導とは？

鐘が鳴つて圖畫の時間が始まる。対象物を與へるか、自由に選ばせるか、目的を示すか、各自モチーフを決定するか、免に角仕事にかゝらうとする用意をして、思想の整理、着眼の要点、などを定め、愈々製作にとりかゝる。製作中にもいろんな所作があらう。反省したり、批評をしたり。出来たものを集めて終りの鐘が鳴つて後も、評点や評語などをつけてやつたり、いゝのを貼り出したり。或は時々展覽會をしたり。繪に關するいろんな話をして聞かせたり。實際の繪や複製などを見せたり。遠足などに行つて景色などの美しさを語り合つたり。單に一時間の教授に限らず、學期を通じ、學年を通ずる大がりの美育に關する營み、さては各學年にまたがる美育の計劃などは、いづれ皆指導ならざるはない。

今日の學校組織で教師と兒童とが向ひ合ふと云ふことが、即指導と解釋されなくてはならないから、どんな場合にも無指導と云ふことはない。

いゝ先生が受持つと一向黙つてゐて、別に指導らしい指導はしてゐないやうであるのに子供の成績はすん／＼上り、單にうまい繪がかかるやうになるばかりでなく、美に向ふ態度からして立派になるかと思ふと、あまり圖畫の得意でない先生が受持つと、いろ／＼準備もやり、口を酸つぱくして喧しく注意もすると云ふわけで、先生はいつも自分は繪が下手なのだからせめて指導の上で抜かりのないやうにと、大汗大童になつて指導これ力めるけれども、一向子供の成績が上らず、子供は圖畫はどうも面倒で厄介なものだと思ひ出し、圖畫は嫌ひだと云ふ結果になると云ふ風なことも随分あるのである。

そこで指導しても却つて駄目だ。寧ろ之は指導せず自然に任かせて置く方が結局兒童を自由に生かすので、指導は先づやらないがいゝなどと思ふことになり勝ちであるが、それは實は大きな間違ひであつて、美育に於ては只無暗に

しやべつたり、瘻い所へ手の届くやうな、注意を與へてやつたり、いろ／＼道具立てを完全にしてやると云ふやうなこのみが指導でなくて、一そうそんなことをしなくても、無言の腹藝と云つたやうな中に、有能な指導が籠ると云ふことがかなり大切なことである。

どう云ふ場合にどう、と實際問題を考へる前に、一体指導とは何であるかを考へて見度い。

しかし之は言はずとも知れたことで、美育の目的によく合致するやうに、児童をうまく導いてやることであるに外ならない。

美育の目的は既に述べて来たから、之に依つて自ら指導とは何であるかもわかるわけであるが、第一は美に結合してゆく夫々の個性に束縛を與へることをせず、あくまで個性が自由に働く道を立て、やることである。

これに就てこまかいことを云へば際限はないが、個性をして動きの取れないやうに、教師が斷案を下してしまふことがあつてはならないのである。例へば、

「そんな所をかくよりも、こゝをかく方がいゝのだ」とか、「この線はこう引くべきものである」とか、「その色は駄目だ、この色を塗らなくては」とか何とか云ふやうなことを指導だと思つてゐることである。

それは指導ではなく干渉であつて、時々「なる程言はれて見ると、さうかいなあ」と合点することはあるにしても、折角働き出してゐた個性が、俄かにおちけづいてしまつて、只ひたすらに誤らざらんとのみ力めるやうなことになる。新鮮な潑刺たる個性の働きは影をひそめ、如何にも生氣のない、影の淡い仕事に終つてしまふ。

こう云ふことが度重なる間には、すっかり萎縮した、元氣のないものになつてしまひ、すべて退嬰的で進取獨創の力が失はれてしまふ結果となる。

美育の目ざすところとして、抜目のない、小賢しい結果なんか寧ろ第二義第三義だ。場合に依つてはそんなことは放つて置いて、少しでも個性の實感を強く鋭敏に働かせるやうにしたいものである。

「そんな所でかくよりも、こゝがいゝのだ」と云ふ代りに、「モットいゝ所があるかも知れなら少しさがして見給へ」と云つたらどんなものか。

「この線はこゝ引くべきものである」と教へてしまふ代りに「どうだ、そんなに見えるかい、嘘をかいてるやしないか?」と云つて反省させたらどうだらう。

「こゝう云ふ風に陰がついてゐるではないか」と云ふ代りに、「丸つこく見えるのは何故だらう?」「さうだ、明暗だ」「そしたらその明暗で一等明るい所は?」「なる程」「一等暗い所は?」「一つよく見てやつて見給へ」「程度を誤るな」と云ふ風にすべて個性の働く場面を断案を下して暮いでしまはないで、一々よく見させる餘地、即ち個性の働く領分を與へ、発見させるやうに仕向けて行くことだ。自ら発見し、自ら開拓した喜びは個性の働きの自信と勇氣とを與へ、力は勃然として起り來るのである。

美育の本領は個性的創造の力であつて、豫想されたる物的結果ではない。さう云ふ指導に依つて齎らされ得べきところの勇猛心である。燃焼力である。

建設力である。

指導の第二は個性の働きの必要な手段方法を授けることである。之は創造と模倣の所でも述べたが、その手段方法があまり通性に密着すると、個性の道を塞ぐことになる。モチーフは個性から生れるのに手段と方法が先廻りするために、手段方法が反對にモチーフを生むやうなことになる場合が多い。例へば「此花の描き方は」と出る時はそれに依つて、最初考へてゐたモチーフが破壊されてしまふことがある。或子供はあの花の絹のやうな光澤をかゝうと思つてゐるのに、授けられる描法は寧ろ松毬のやうなガサ／＼したものをしか現はさないことになることしたら、折角のいゝモチーフも臺なしと云はねばなるまい。

此事は前述指導の第一要件である個性を束縛しないといふことに悖るから、もとよりいけないが、個性の母胎である通性、即ち客観性に對する手段方法又は觀察描畫の態度のやうなものならば、すべては個性への養分であるから、どこまでも指導して行かなくてはならない。例へば用具の取扱法であるとか、その利用法、繪

具の驅使法、觀察の態度、描畫の態度、普遍的な技巧方面等はどこまでも援けてやらなくてはならない、之は要するところ個性の働きを遺憾なく圓滑に發揮させる道であつて、指導の積極である。

第三は個性への激勵である。美育に於ては褒めることが何よりである。いゝ所を見つけて褒めて激勵することである。貶すこと戒めることは最も拙劣な指導である。少しでもいゝ所があればそれをほめる、どんな場合でも必ずいゝ所があるものである。いけないところは、どんなに得意になつてゐても一向ほめないと云ふことに依つて充分の戒めとなり得る。

例へば一枚の風景畫でも、この木が大變いゝとか、他はまだくゞだが空丈けはほんどによく見てあるとか、色は少し失敗だが構圖はいゝとか、いろくゞ云へると思ふ。子供がほんどに美に打込んで努力したところをよく知つて、ほめて、激勵してやると次第に調子が乗つてよい態度が生れて來るものである。

反對にどんなに伶俐にかけてゐても、鼻にかけて自慢してゐるやうな態度があ

つたら、決してほめてはならない。さう云ふ子供が圖に乗つて來たら飛んでもない飛び上りものになつてしまつて、始末が悪い。えてさう云ふ子供は技巧ばかりでちつとも落ちついて、自然をまじく見やうとはしてゐないものである。

さう云ふ子供の繪は見向きもしないことだ。自ら恥じて淋しくなれば、始めて言つてやりなさい。「あなたのは大變うまいのだが、自分でうまいと思つてゐるから何をかいても、みんな同じものになつてしまひます。進歩しなさい。進歩しなさい。自分のうまさなんか忘れて一生懸命に實物をのぞき込みなさい」と。

子供に限らず自分のうまさなどを鼻にかけてゐるのは、女の器量自慢見たいでいやなことである。

指導の上では大体さう云ふことを心得てゐればよからうと思ふが、何しろ繪をかゝせると先生より子供の方がうまくて手のつけやうがないと云ふ風なことは随分ある。之は美育の上の大問題で、制度の上にも考へなくてはならない點が多々あるのであるが、指導の眞の精神がわからねば指導が出来る道理なく、その精神



のわかるのは教師自らの美の修練より外に道はない。いくら指導の方法を智識的に修得しても、それは実際の場合にちつとも生きて来ない。

教師にいゝ繪がかけると云ふことが何よりも指導の力である。少し位干涉に亘るやうなことがあつても、それは決して美育指導の實に叛かず却つて生きて来るものである。指導の真隨は美を知るものゝみを知つてゐるのであつて、智識の所藏するところではない。指導上の常識はほんのその助けに過ぎない。

常に生きて成長し、伸展するのが美育の姿である。だから此氣息に生きて、教師自ら常に美の成長がなくてはいけない。美術品を見ること、自然の美に注意すること、自ら創作すること、怠つてはならないことである。それは單に職業的でなく、又一個人の人間として。子供に美育が大切である如く。われ等にも亦。

### 七、美育の勸定

人間の教養は風貌に現はれて来るものである。その人の顔を見てその人の教養

の程度、方向などがわかるのは事實である。歩き方等で人となりがわかる杯と云はれてゐることも實際である。

しかしそれも、只漫然と見たのでは、いろ／＼の表面的な粉色に蔽はれてゐて容易にわかるものでなく、深い洞察の眼が必要である。

美育の結果は教養が面貌にあらはれる如く、彼等の作品に直接現はれて来るのであるから、兒童の作品を洞察の眼で見なければならぬ。漫然と概念的に見たのでは逆もわかるものではないので、子供の繪を見わけると云ふことは、仲々むつかしく、香氣な仕事ではないのである。

勿論單なる採点のための採点ではないので、如何に兒童が美に注意したか、如何に自分の美を大切にしたか、美の迫及に如何なる成長があつたか、如何程美の成長に對する態度が出来て来たか、と云ふやうなことが、丁度親の眼で子供の生長や發達が如何に愛に満ちながらも、痛切に彼の將來に結びつけて考へられるかと云ふ風な、愛に根ざした極めて嚴肅な、注意深い、又は洞察的な態度で眺めら

れて、その結果が常に次の教習に活用されると云ふ風でなくてはならない。

それが單にこちらの好悪や、趣味や、概念的な子供繪の類型などに捉はれたり、美でないものゝ智的な形骸や（智的な表現が全々いけないと云ふのではない）、小賢がしい技巧等の粉黛に感心したりして、彼等の個としての種々なる表現に、「美」につながる姿とか、「美」に離れる姿とか、つまりそこにある「美」、「美の理想」、「美の發展」等、等、美に關はる「彼」を見るのでなかつたならば、さう云ふ美育の勘定はすべて禍である。

美育の勘定こそは實に大切な一つの指導の道であるが、このところがよくわかつてゐないから、随分いゝ成績品を悪いとしたり、却つてよくないと思はれるものが馬鹿に譽められたりするトンチンカンを現出するのである。それは單にトンチンカンだと云つて済されない。教育の上で罪惡が行はれると云ふならばさう云ふことであらう。

智育では比較的さう云ふことが少いと云へるが、美育では「美」の本体が掴み

難いものであるだけに間違ひの多いことよ。

甲の人が見るのと乙の人が見るのと、まるで正反對のことがある。子供こそいゝ面の皮である。美育の立場がはつきりして來ればさう云ふことはない筈であるが、過渡期には何と云つても此矛盾は免れ難い。

それにしてもお互に兒童に對する熱愛をもつて美の修練に怠りなく、兒童の表現に洞察の眼が自信をもつて開き得られるやうに務めなくてはならない。

われ／＼が一々の兒童の作品を、さう云ふ眼をもつて自他なき心持で勘定する時は、力の及ばなかつた自分への苦痛もあることながら、いろ／＼手入をしてやつたり、肥しを與へてやつたりした作物が、自然のめぐみに依つて足り穂となつて收穫されたやうな楽しさがあるものである。それにしても又次の計劃への鑑みとなり、勇躍となるべく、深い省察が個々の上にも、個を連ねる縦の傾向の上にも拂はれてゐなければならぬ。

美育の勘定をする時には、如上のことをよく腹に入れて、大体次の順序に従つ

て、慎重にやらなくてはいけない。

先づ個性を充分に知悉してゐること。

立てたモチーフが何であるかを洞察すること。之は常に兒童に作品の裏にかゝせるやうにしてもいいが、そのモチーフがいくものであるか否かを考へること。モチーフの、よしあし、とは何であるか。彼が純真にその自然の中から発見した美であるか否か。そう云ふことを考へること。

次にはそのモチーフが生かされるために拂はれた努力はどうか。果してその努力に依つてモチーフが生かされてゐるかどうか。(之は技巧の正當な運用の如何を云ふのである。)

最後に之等の過程を通じて作品そのものの持つ力、効果、魅力と云つたやうな成果の絶対價值に及ぶのである。先づさう云ふ順序で見るのであつて、すべては間隙のない組織を保つてゐる筈であつて、此中には幾多の場合と、幾多のこまかい實際が含まれてゐる筈である。だゞこれまでは最後の場合のみが成績を見る標

準であつたやうだが、それはあまりにも物的な結果にのみ重きを置き過ぎて、さうした結果を齎す根本を閉却したと云はねばならない。美育に於ては結果よりも、美に對する如何なる彼であるかゝ大切なのであるから、寧ろ初めの三項こそ重大であると云はなければならぬ。そしてそれ等是一つに作品を通して、作品の背後に感得すべきそれ等であることを忘れてはならない。つまり作品そのもの結果的價值のみに止らないでその結果の依つて來れる過程にまで溯つて美の中に如何に生きに彼であるかを知るやうに務めたいのである。

各發達段階の大方針

生長しつゝある兒童の心理状態や能力や智力や体力などを考慮して方法上の方針を定めることは、獨り美育に限らず極めて重大なことである。しかし智育は智育として、体育は体育として、又訓育は訓育として夫々特別な事情があつて、方針としても夫々様子が異なるやうに、美育は美育の立場から特に方針を確立しなくてはならない。

勿論同じ年齢の兒童にも發達上随分遅速があつて、もどく個性を重じなくてはいけない美育にあつては、最初から何の學年にはどう云ふ方針と決めてかゝるのは抑々間違ひの初りだと云へば言へないこともない譯だし、随分さう云ふことをやかましく云ふ人もあるのだが、今日の教育制度下にあつては、そう云ふことはかなり空想的な理想であつて、却つて手の出しやうのないむつかしいものにしてしまふことになると思はれるのである。

だからやはり大体の方針を定めることは何處までも必要で、要はこの方針をうまく運用することの如何にある筈である。一律にそれに捉はれると云ふことがい

けないのである。伸びるものは何處までも伸ばしてやり、遅れるものは無理に不自然な課程をやらせる必要なく、充分地歩を固めさせてから順次進ませてやるべきである。

尋常一年から六年までの發達過程をいろ／＼に別けて見ることも出来るのであるが、又その別け方に依つて夫々特長も生ずるわけで、先づ第一に自然心理の上から、第二に智能發育の上から、第三に美育そのもの、性質の上からいろ／＼考慮すれば、大分議論もあることながら、私としては一二年を下學年とし、三四年を中學年とし、五六年を上學年とする別け方を取るのがいとと思つてゐる。尤も嚴密に言へば一年毎に異なるのであるが、この三つの段階に大別して不都合はないと思つてゐる。その上に高等科の一二年を一括して置いて考へることにする。各段階の大様方針は次の如くである。

### 一、下學年（一、二年）

此期の兒童は美育と云つても、彼等の本能に従つて自由に、殆ど遊戯的に取扱

ふべきものである。彼等の自然的な行方であるところの直覺的、端的な事物の觀念化を基礎として、彼等に最も印象の深い動的なもの、新奇なもの、明晰なものなどを教材として取り、盛に觀念の豊富を計り、旺盛な發表慾に従つて、自在にその觀念の表現をやらせることが第一である。

事物の細かい觀察とか、忠實な實相の把握など、云つたことは先のことであつて、此期の兒童はどこまでも直覺的に物の特徴を掴ませればよいのである。むづかしい抜目のない觀察を強いて、客觀的正確を期すると云ふやうなことは、決してびつたりすることではない。

随つて表現も極めて概念的で、持つてゐる觀念を素純な形式に托して、即興的乃至は印象的に發表するのであるから、大人が考へて不合理なやうなことがあつても彼等は平氣なのである。又それで充分彼等の心持を盡してゐるのである。

表現形式の上で八釜しいことを言つたり、やらせたりすることは、却つて彼等の大膽で生々した實感と表現の道を塞いでしまふものであつて、さう云ふことを

心配するよりも、彼等の表現慾が充分満足するやうに、數多くドシ／＼かゝせることである。普通の形式的のことがらはそのうちにいつの間にか發達して來るのである。

兒童がいろんな物や繪を見ることを喜び、繪を描くことが好きになれば目的を達したのである。勿論子供はさう云ふことが最初から好きなのであるが、從來のやうに、形式や技巧の方面を考へ過ぎると、兒童は、繪はむつかしいものだと思ひ、ピク／＼してしまひ、好きでなくなつてしまふのである。

技巧とか筋肉練習と云ふやうなことゝ材料の驅使と云ふやうなことも、自然に出來て來ることであつて、何處までも繪に對する熱を煽り、子供の心にびつたりする材料を、盛にかゝせることが何よりである。さう云ふ間隙なき有様が美の境地であつて、生命のあるものは常にさう云ふところから生れて來る。

しかし放縱になつたり、冗談半分になつてはおしまひである。遊戯的にやらせると云ふことは何もさう云ふことを意味するのではなく、あくまで眞劍味のことも

つた仕事でなくてはいけない。圖書を何處までも大切に考へるやう、うまく賤けて行つて、よい學習態度を築くやうにしたいものである。

## 二、中 學 年 (三、四年)

此期の兒童は智能が相當に發達して來るから、下學年に於けるやうな、直觀的、遊戯的なことでは満足しなくなつて來るものである。

そこで此期の方針としては事物のリアル(實相)に忠實であることを第一としなくてはならない。觀察の要領を授けて次第に觀察を深め、しつかりと物の實相を把握させることに依つて、美の境地を健實に築き上げ度いと思ふのである。

従つて表現の上にも充分注意が拂はれ、繪の構成に關する要領や、材料の驅使に關するあらゆる方面に修練を積むやうに心掛けるのである。さう云ふ形式方面のことが重んぜられなくてはならないと云ふのは、美の境地が次第に深い所に根ざして來るから自然表現の形式を要求して來るので、形式だけを取離して考へる

のではない。

ともすると知的にのみ物事を観察したり、判断したりして、乾燥無味に陥り易い時期であるが、美育の本体から考へて形體に捉はれて美の境地をおろそかにするやうなことはないやう、モチーフを大切にしてい、表現の方法はすべてそのモチーフを生かすために必然に生れて来るやうなものであり度い。

上學年で愈々美育の眞生命を遺憾なく發揮させるとして、此期は實にその準備の時代とも考へられるので、圖書に對する趣味と熱を作り、眞剣な學習態度を確實に築き上げ、次の時期に備へるところがなくてはならない。

### 三、上學年(五、六年)

中學年で作り上げた健實な基礎の上に立ち、思ふ存分藝術的な立場に於て、美育の本領を發揮させることが本旨である。自然の美の觀察、美術品の觀察を益々深めて、よくその境地に至り、愛を養ひ、各々の個性に藝術的趣味を高め、教養

を培ふことに全力を擧げるのである。

美の表現は、モチーフと表現形式の間隙なき一致であるから、中學年で相當に養はれて来た表現技巧もこゝではよく個性の美の感銘に密着して行はれなくてはならない。そう云ふ一致は仲々むつかしいものであるから、會得した技巧の應用、新しい技巧の發見には常に注意し、頭と手とが並行してゆけるやうに計つてやらなくてはいけない。

かくて積み上げられた美的教養は單に實生活の趣味と云ふやうな消極的なことでなく、すべて人としての生活の上に滋ひとなり、愛となり、高雅な人品となつて現はれて来るやうにまで期するところがあつて欲しいものである。美育が德育であると云ふのは結局それなのである。

### 四、高等科

尋常科上學年の方針を持続すればよいのであつて、科學的に美術を研究するや



うな態度や、専門家のやるやうな真似はさせ度くないのである。

尋常科上學年の方針で普通の人間としての美的教養を深めてゆくことはどこまで行つても果しはないのである。より多く、より深く美の經驗を積むことは全く望ましいことである。

高等小學校の圖書科は隨意科であるが、誠にその意を得ぬことで、恐らく隨意科だからと云つて圖書を省いてゐると云ふ學校もさう澤山はあるまい。あればよく／＼のことであらうが、もつと時間數を増し度いとさへ思ふのは單に私丈けでなく、教育界の大きな要求であることは明白である。

## 教 材

### 一、教材の四方面

美育の立場から澤山の個性を相手にすることになれば、教材はなるべく広い範圍から取つて來ることがよいと考へてゐる。或狭い範圍でも深く打ち込めばよいと云ふ考へもあらうが、それは私の取らないところである。

凡そ彼等の生活を取巻く事象はすべて美育の材料であると思ふ。最も彼等に適切な方法と、対象とを、許す限り豊富に與へることは個性を生かす所以でもあり、兒童に廣く美の道が開かれることになると思ふものである。

それで教材の取方を便宜寫生畫・記憶畫・圖案・鑑賞の四方面に分類する。

此四つの名稱は適當でないかも知れないが、名稱などに構はず、すべてを此中に盛ることにした。この四つの教材の内容を説明すると次の通りであるが、實際の取扱方は教材解説の中で一々試みてあるから此處では省くことにし度い。

#### 一、寫生畫

直接實物に對してその美的感銘をいきなり表現して行くことである。之は美育

としての圖書教育には最も大切なことであつて、われ／＼を圍繞する自然界に直接眼を放つて其處に美を發見すると云ふことは、人間が自然に密着して、自然から、その豊富極よりないよきものを吸収し、成長に資することを意味するので、私は何處までも美育の主体を寫生畫に置き度いと思ふのである。

寫生畫の取材内容は又次の三方面に分けて考へることが出来る。

◎静物

いろんな器物、製作物と云つた人工物、花や果物、野菜のやうなもの、さては魚貝類やいろんな動物などで、普通机の上や床に置いて寫生するところのものを指すので、時に東洋畫の花鳥と云ふ風に生きた鳥や獸などを寫生してもすべて静物として取扱つて置く。

◎人物

われ／＼に最も親しみ深く、最もわれ／＼がよく理解して居るものとしても、いろ／＼な變化や統制があつて美育の材料として深い價値のあるものとして、特に人物は寫生畫の大切な教材であるから、許す限りいろ／＼な人物を對象として取扱ひ度いものである。

◎風景

大きな自然の風景はもとより、どんな小さな自然界の一角でもよい、美育の對象として、誠に變化極りなく、果しなく深いものである。子供がほんとうに喜んで打込むのは風景寫生である。それには赤裸々な自然としての深い理由があるので、以前放任主義の時代にあつては、風景寫生許り流行したからとて、風景寫生と云へばダラケたものとして抑制しやうとするのはいけないと思ふ。

彼等が眞剣にやる仕事ならばうんとやらせるがいゝのである。

しかし風景許り好きで人物や静物はいやだと云ふことになるのは嘘である。眞の寫生的態度に於てはさう云ふことはない筈である。

たゞ何れの方面にしる、感興の豊かなものを盛ることが何よりで、いつも無味乾燥な、ピツタリしないものをやらせるからいけないのであると思ふ。

2、記 憶 畫

記憶畫と云つても、かつて經驗した事物の印象記憶を表現する意味の所謂記憶畫丈でなく、さう云ふ記憶印象、いろんな觀念の上にする想像を表現する想像畫、さては工夫考案に依つて觀念内容の総合的な表現をする考案畫（圖案にあらざる）等を指すのであつて、思想畫と云つていゝか觀念畫と云つていゝか、直接物を對象としない内面的感興の表現のあらゆる場合を指すのである。

此方面のことは從來は殆ど下學年に限られてゐた様であるが、比較的、適不適はあるにしても、上學年だからと云つて廢すべきではないと思ふ。何故なれば吾々の美の感興、美の表現と云ふ様なことは、單に寫生としての物を直接對象とする場合のみでなく、この記憶畫的な場合が随分あり、個性で充分淳化されたものである丈に餘程力強いものであるとも考へられ、従つて美育としての意義が深いから段々分量は減するにしても、最後まで捨て去らない考へである。

### 3、圖 案

寫生畫、記憶畫などを純正美育と云ふやうな言葉で言ひ得るとしたら、圖案は

應用美育と云ふやうな言葉で言ひ表はしてもいゝであらう。純正美術に對して應用美術と云ふものがあるのと同じやうな意味で、圖案は美的修練の實際化である。人として持つ裝飾本能の教育であつて、美育の立場からはよほど重大な一面でなくてはならない。

兒童の將來に於て社會のあらゆる裝飾方面の實際が正當に享受され、批判され、高められて行く爲には純正美育の方面で根底が築かれると同時に、應用美育としての圖案に依つて、此方面の直接の教育が行はれることは何處までも棄てるわけにはゆかない。

更に兒童自身の生活を考へても、彼等にも亦彼等としての裝飾がある筈である。兒童の實際生活上裝飾の趣味が豊かになり、高尚になるやうにさせることは寧ろ何物にも先立つて美育の最初に着眼しなければならぬ所であるとも言へるのである。

然るに從來の圖畫教育では、圖案は殆んど捨て、顧みられない状態になつてゐ

る。新定畫帖時代に於ては相當圖案は行はれもしたが、自由畫以後は全く、その實施は地を拂つてしまつたと云つてもいゝ有様である。

新定畫帖時代の圖案は、何故亡んだかと云へば新定畫帖の亡んだ理由と一つであつて、形式に走つてしまつて、ちつとも兒童の實生活に密着してゐなかつたからである。兒童に取つては非常に交渉の薄い無味乾燥のものであつたからである。

私の取らうとする圖案は、もつと兒童自身の生活に直接な、すべて彼等の實際に役立つもの、いきなり實際の物に應用せられるやうな教材を取り、單に機械的な勞作に終始するやうなものではなく、兒童が裝飾上實際的の興味に依つて、作業の上にも考案工夫の上にも或樂しさをもち勇躍して熱中するやうな教材を取り、すべて新規畫直しにやり直す方針を取つた。

さう云ふことからして、圖案の形式などは第二のこととし、さう云ふむつかしい規範内に追ひ込まないで、なるべく自由な扱ひとし、定規、コンパス、尺度

なども早くから使はせ、單に描くと云ふばかりでなく、實物に應用すると云ふ意味や、作業を自在にして輕便な方法を應用すると云ふやうな意味から、勢、手工と同じことになる場合も随分あるので、ほんとうに圖案教育を生かさうとならば、着眼を更新して大改革を實行しなくてはならないと思ふのである。

その實際は教材解説の項に就て了解され度い。

#### 4、鑑賞

所謂自然の美は常に潜在的であるが故に、容易なことで把握することは出来ないものである。之を直に入つて參見し得るものは餘程の天才でなくてはならないものである。われ等多くの凡俗は到底それを望むことは出来ないのである。

昔野の草の中から始めて米を發見して食物とした者は天才であつた。誰れもがそれを思ひ付きはしなかつた。

兒童に創作許り強いて見ても決して自然の中から自在に美を發見することはなかつたと云ふ事實を今では多くの教育者が痛切に知つたことであらう。それは當

然すぎる程當然なことである。それは自然の美が決していつでも表面は現れてゐないと云ふことを意味するものである。

ところが美術品の美は表面に現はれ、常に真向からわれ／＼を打つて来る。それは美術品は常に美の計劃的な構成に外ならぬからである。能動的に観る者へ働き掛ける力を持つてゐるからである。われ等は先づ打たれ易い美術品の美に打たれる必要がある。それはやがて自然の美に参見する鍵を握ることである。幾多の美術品に接することに依つて、然も個性は其最も親しみ易い美術品を中心として幾多の美術品から彼を培養するあらゆる美の鍵を得るであらう。眼を轉じて自然に向へ、自然の扉はその鍵に依つて容易に開かれるであらう。第一の扉が開かれたならば、再び美術品に歸つて第二の鍵を求めよ。第二の鍵に依つて開かれたる自然から幾多の美を汲み取ることが出来るであらう。それはやがて美術品に向つて反對に其扉を開くべき鍵ともなるのである。合ひ鍵はかくて交互に與へられ迷宮の扉は次第にその奥に向つて開かれ、次第に美の堂奥に進み行くのである。

鑑賞と創作はかくて密接不離のものとなつた。美育に於ては兩者必ず相俟つてその深きに至るのであると云ふことをわれ等は知るのである。

鑑賞教育にあつては、知的の取扱ひと、感情的の取扱ひと、兩者相融合した境地に於ける取扱ひとに分つて考へることが出来るが、實は鑑賞の眞の態度にあつては、われ／＼の精神的活動は一切の分野を超越して全体的に働くものであつて美育の本体から云つても全く單に知的の取扱ひと云ふものは意味をなさないものである。こゝに於て其方法は至難であると云はなければならぬが、要するに一切の理窟を抜きにしても、なるべく多くの美術品に接せしめると云ふこと、彼等をして多くの美術品に浸らせると云ふことが何よりも重要なことである。各々の個性はその中に於て夫々に己の美を發見し、最初はウロ／＼しはがらも次第に自分の歸趨を得て来るものである。決して吾人は直にその著しい影響收穫がなかつたからと云つて落膽してはならない。長く持久して、美術の美が不知不識の間に兒童の個性に滲透することを待たねばならぬ。

何はあれ、家庭に美術を持たぬ多くの児童のためにも、小學校は一つの小美術館を備へる意味に於て、美術品や、美術品の複製等、所謂鑑賞材料の蒐集に努力し、その特別教室や普通教室に常に之を飾り美の殿堂を彼等のために用意すべきである。

之全く鑑賞教育唯一の方法であつて、その完備を得るならば徒らに無駄な骨折をしなくてもよいのである。(鑑賞材料蒐集の項参照)

美術品には高尚なものと低級なものと、児童にわかり易いものと児童にわかり難いものがあることは普通に考へられることであるが、低級俗悪なものとなるべく避けるにしても、われ等は如何に高尚で児童にわかり難いと思はれてゐるものでも、却つて純白な児童にこそ、よくわかるやうな氣がするのであつて、児童の思想に媚びる必要は毛頭ないのである。わかり難いものがあるとするればそれは個性的趣味の相違か、あまりに偏狭な趣味の養成をなした教育上の不備に原因するものと思ふ。後者は何處までも反省して改めなくてはならぬ。

次に鑑賞教材の取り方は理想を言へば限りがないとしても大体次の三つに大別することが出来る。

● 美術品の鑑賞

名畫名作の複製又は實物、児童自身の製作品、郷土の美術品其他あらゆる美術作品の實物並に複製、を教材として之を解説するとしなむに拘らず、單に觀て鑑賞する場合と、充分に觀て鑑賞する意味に於て模寫即ち臨畫する場合との二つとした。臨畫は從來一つの獨立教材として取扱はれたが、われ等は鑑賞と云ふ一項目を設ける以上、その獨立性を認める何等の理由を發見しないから、鑑賞の一分野として此處に置くのである。勿論單なる原畫の模倣でなく、鑑賞教育として意義あらしむべく、各個性を通じ發達の程度に應じて自由に感得した美を表現せしむれば足るのである。隨つて原畫に難易の別と云ふものはない。更に美術品の鑑賞では児童の境遇、生活に應じて彼等の世界に於ける美術品の蒐集をやらせることにした、眞の鑑賞教育を生かし彼

等の美術の美に對するよき羨として教育上重大な意味を認めるからである。

● 自然物の鑑賞

寫生は或意味から云つて自然物の鑑賞と云ひ得るかも知れないが、寫生の製作又は創造的独自の境地を本体とするが故に單なる鑑賞の一分野に入れるわけには行かない。之は美術品の鑑賞に於ける臨畫と同一見地に立つことを許さないものがあることは何人も認める所であらう。

自然物の鑑賞は只彼等に取つて愛すべき自然物、人工物等の蒐集と翫賞を意味するので、さゝやかな自然物の中に敏感なる求美の眼が働くことはやがて奥深い自然の美に參する第一歩であるからである。

● 美術雜話及美術史

單に視覺を通じてのみの鑑賞教育に加へて説話主義の方法に依つて美術の何物かを知らしめ、美の種々相の具現を説き、美術の發達を知らしめ、離れた立場から美術上の美を批判鑑賞せしめる一面である。或は又美に參するよ

き態度、豊かなる心の用意を與へる意味であるとも言へやう。

要する所鑑賞教育は兒童の環境を出来る限り豊富な美に依つて満たし、兒童をして常に其中に浸らせ、不知不識の間にその感化を受けて個々の美的感受性を高めるやうにするより以外によき方法はない。然もそれは日常不斷の間に行はるべきであつて、特に時間を分割したのは時々兒童の感銘を整理し、新しき環境を作るための意味である。

殊に平素の成績品等の鑑賞批判は特に鑑賞の時間でなく殆ど毎時間行ふべきである。

二、各學年教材の配當

寫生畫、記憶畫、圖案、鑑賞の教材の四元は夫々特殊な立場をもつてゐるので、これを各學年に如何に配當するかは誠に重大な問題と云はねばならぬ。兒童心理に對する見解や、能力の發達に關する考へ方、さては教授上の都合などに依つて、その配當には色々のやり方があるであらう。



私は大体次の如き案を立てゝゐるが、必ずしも確定的のものであるとは考へてゐない。人々の意見に依つて多少の變改は免れないし、又實際の運用上で計劃通り行かない場合や、多小變更した方がいゝと云ふ臨機の處置はいくらもあらうと思つてゐる。

只大体の據り所としては最も適當なものであらうと思つてゐる。

教材	學年	
	高	2
寫生	男六	女五
記憶	一	一
圖案	一	二
鑑賞	二	二
	高	1
	6	5
	4	3
	2	2
	1	1

此數字は一學年間總時間數の十分比であるから、若し毎週一時間宛の學年は一ケ年約四十時間と云ふことになるから、表の一は四時間、二は八時間、六は二十四時間と云ふことになる譯である。

それで各學年に亘つて説明するならば、

尋一……兒童心理の上から記憶畫を最も多くやらせ、寫生は却つて適當でないから極少量にしたが、それでもよく物を見ると云ふことは大事なことからから時々之をやらせることにした。

圖案は寫生と等量で子供の持つてゐる裝飾本能の現れを時々引き出して助長することも忘れてはならず、特に設けた鑑賞の時間が寫生や圖案などよりも多いのは、なるべく兒童の觀念や思想を豊富にしてやり、發表に活力を與へる用意である。

尋三……尋一と別に變りはないが、只記憶畫を少し減じて之を寫生にまはし、觀念、思想の遊戲から次第に實感を重んずるための手心である。

尋三……鑑賞は少し犠牲にした形であるが、此學年は寫生と記憶を平行させるところに、妙味があるので、兒童心理から云つても矛盾でなく、教育技術の上から眺めて寫生記憶の平行は此學年に極めて適切なことと思つてゐる。

る。理由は取扱方針の項に述べることとする。

尋四……すべての發達から見ても、児童心理の傾向から見ても寫生中心でなくてはならず、健實な實感を大切に養成しなくてはならぬので、もう少し記憶畫をやらせてもよいが、大部分寫生に譲つてしまふこととした。鑑賞は此期の乾燥を防ぐ意味で尋三の犠牲を取返すこととした。

尋五、六……兩學年とも比率は同じことであり、同様の方針であるから一括して云ふと、もとより美育の完成期でもあり、児童心理から云つても創作に専念すべき時であるから寫生は本体として鑑賞は稍犠牲にした。

圖案を特に増したのは、美育の實生活化に對する用意である。

記憶畫を捨て去らないのは此案の特色で理由は己に述べ來つたつもりである。

高二、三……すべて又同じ比率で精神としては尋五、六と何等異なる意味はない。

只鑑賞は美育を深めるに隨つて次第に重大となつて來るので、おろそかにしないつもりである。

にしないうつもりである。

女子は美育の實生活化が特に密接だと思ふので、寫生を割いて圖案に増し加へることを敢てしたわけである。

全体を通じて鑑賞に就て特に云ふべきことは、鑑賞は決して此特定の時間のみに行ふべきものではなくて、何れの教材の時間にも多少に拘らず行はるべきであり、殊に平素不知不識の間にその環境に依つて行はれると云ふやうなことが本体であるけれども、その平素のための指導と云ふやうな意味で時間を特定したわけである。

若しさう云ふ意味でなかつたならば、非常に重要な部目としての鑑賞に對してはあまりに僅少の配當量と云はねばならない。

用

具

### 一、兒童用具の選定

今日いろいろな用具が行はれてゐて、その撰擇に迷はされること實に夥しく、伶俐な製造家は次から次へといろんなものを拵へて大變圖畫教育に貢獻するやうであるが、寧ろ教育家は製造家に依つて教授方針を左右される形でさへあるやうだ。

いろいろな点を考慮すると決して新しいものが進歩してゐるとは言へないので、取るべきは取り、捨てるべきは捨てる識見と眼力をもつてゐなくては、用具のために往々にして美育の本体を失ふやうなことがないとは言へない。又實際にその例は多いやうである。

次に用具は個性尊重の表現にあつては、夫々の個性に依つて夫々自分の好む適當なものがあるべき筈で、一樣に選定してしまふことのないことは充分承知してゐなければならぬ。或兒童はクレオンを用ひてゐるが、或兒童は水彩繪具でかいてゐる、又或兒童は油繪具をさへ使つてゐたからとて決して悪いことはなく、

それが各々の個性の持味にしつくりと生きて居れば、大變望ましいことであるのは云ふまでもないことであるから、事情の許す限り高級なものを進歩した兒童に使はせたり、遅れた兒童には手馴れたものでよく練習させたり、特殊な兒童には特殊な材料を使はせたりすることは、大いにあつて然るべきことである。

只夫々の材料に對する智識と、批判をもつて大体の適材を考究して置くことは何處までも必要なことであり、それに由つて大体何の學年にはどう云ふ材料を取ると云ふことも生れて來る筈である。

#### ●鉛筆

鉛筆は素描の材料として昔からあつて、いつまでも捨て難い健實な材料であるから、何れの學年にも取入れることにしたい。

單に鉛筆畫としてのみならず、彩畫の構圖をする上に、彩畫に混用する上に、なくて叶はぬものである。値段も安價だし兎に角永久に生命がある。

製作の種類に依つて硬軟種々のものが必要であるが、寫生、記憶畫用としては

4Bから2B位までの軟かいものが結構だし、こまかい圖案や、製圖ではHのやうな硬いものが適當であるけれども、そう云つた硬い鉛筆でデリケートな製作をするのは高學年のことで、低學年では何に依らず軟いもの一種類で差支ない。

いゝ鉛筆になると限りがなく、アメリカ製のグイーナスなどは一本二十錢もするので大變工合はいゝけれども小學校向きではない。

兒童用としては安いので結構と思ふ。殊に近來は技術が進歩してあまり粗惡なものはないやうだから、どれでも安心して使へる。只なるべく濃く、つきのいゝものがいゝが、鉛筆の黒色と云つたやうなことにも注意すると尙結構である。

鉛筆は畫用紙の上でその粗面に依つて磨り取られるやうな工合に使用するのが度であつて、あまりおさへ過ぎて、紙面に溝が出来るやうで、果てはテカ／＼光り出すと云ふことになるのは面白くない。之は紙質に對して鉛筆が硬過ぎる場合と、今一つは軟かい筈の鉛筆でも無暗に嘗めるために心が硬化してしまふ場合とがあるからよく注意しなくてはいけない。

鉛筆書では紙質がバリ／＼と硬く稍粗面のものがよろしい。心を嘗める癖は絶對にやめさせること。

●消 ゴ ム

消ゴムは鉛筆にはつきものである。

軟かい鉛筆には軟かい消ゴム、硬い鉛筆には硬い消ゴムと云つた風に……………。

消ゴムを使はせることはいろんな弊害がある。

消ゴムを手頼りにして眞剣で打かゝらない傾向を生ずる。とか、やり損つた時直ぐ消ゴムを使ふやうなことがあれば（大抵さうなるのだが）最初の間違ひが比較されないため又再び同じ仕損じをくり返すことになる、さう云ふことは非常に面白くない。とか、消ゴムに依つて荒された紙面には彩色をする上に不愉快な結果を呼び易く寧ろ不要な間違ひの線などが残つてゐても遙かにその方がましではなにかとか。

實際消ゴムに禍される場合は大變多いと云はねばならぬ。寧ろ間違つた過程の

線などのそのまゝ残つてゐるところに面白い味があるので、何も消してしまはなくてはならぬと云ふことは全然ない筈である。

こゝう云つて來たからとて私は消ゴムを驅逐してしまはふと云ふのではない。間違ひの線が残る方が面白いなど、云ふのは大人の趣味に過ぎないので、子供はやり損つた線や、いらぬ線などはきれいに消し取つてしまひ度いのである。すつかりよくない線などを取り去つて新しい活力を出し直すことはいゝことであらう。持たなくてもいゝ子供には持たせる必要はなく、欲しいと思ふならば使はせても決して差支はあるまい。要するところ最初に述べた、消ゴム使用の陥り易い点をよく心得てゐて指導するのであつたら、悪くするやうなことはあるまい。児童の勝手にさせて置くのでよろしい。

●木 炭

木炭は極めて自由自在な材料で素描としては全くいゝ、専門家の素描練習に使用する材料である丈け重寶なものである。

消すことが容易であるために、幾度も訂正するやうな嚴重な仕事には適當な素描材料である。

又大きな仕事にも適し、鉛筆などより遙かに強く深い表現が出来るので、出来れば、素描にでも、彩畫の下繪にでも使はせ度いと思ふのだが、素描としては、保存上一々シケラックをかけなくてはならぬし、一般小學校向きとしては容易にいゝ品物が安く手に入らぬ現状だから、素描材料としては特殊な兒童は別として一般の兒童には取らぬこととした。

因みに木炭の剝落止めとしてはニスをアルコールで十倍乃至十五倍位に溶解し、霧吹きで何回も吹きかけるとよろしい。

序に言つて置き度いことは、彩畫の輪廓を取る場合などは木炭で描き上げた儘、木炭の味を生かしながら着彩して行つて面白い効果を得ることもあるが、こもすると炭で繪具の色を混濁し易いから注意しなくてはならない。さう云ふことを防ぐためには形が出来上つたら後軽く拂つて着彩にかゝるのがよろしい。

木炭でしつかり素描だけやらせやうと思ふならば、やはり木炭紙を使はせるべきであり、なるべく大きくかゝせるのがよく、少くとも木炭紙半切位でなくては、充分な素描の練習は出来ない。此場合消ゴムを使ふと跡が滑つて木炭が乗らなくなるから消ゴムの代りに、食パンをひねつて團子のやうにして使ふのである。

しかし食パンを使ふなどと云ふことは逆も厄介なことだから最初からさう云ふものは一切使はないことにし、いらぬ線などは手で撫でれば大抵消えてしまふのだから……さう云ふ心配はしなくて、特別な兒童などには木炭紙と木炭で、人物でも風景でも静物でも素描としていろ／＼かゝせると面白いだらう。

●クレオン

クレオンは昔から西洋にあつた材料で専門家の間にも使用されてゐたのであるが、現在小學校の兒童が使つてゐるやうな蠟氣の非常に多いクレオンは、つい近頃日本で創製されたもので、兒童用としては實にいゝ彩畫の材料である。自由畫

の提唱と殆ど時を同じうして、こうした單純で便利な自由自在な彩畫材料が生れたことが、どれ丈け小學校の圖書に勇氣を與へ、熱度を高め、子供等の描畫慾を煽り立てたことか……我國の初等圖書教育界に一新紀元を劃し、今日のやうな盛觀を致した功勞は大部分をこのクレオンに歸すべきであると思ふのである。

クレオンの前身とも見られるものに色鉛筆と云ふものがあつた。しかし色鉛筆はクレオンの前にはすべて缺點だらけのものになつてしまつたから色鉛筆は再び世に出ることはあるまい。

今更クレオンの長所を擧げるまでもないことではあるが、色鉛筆の如く削る必要がないことは小さな兒童に取つてはどんなに重寶なことかわからないし、何等の媒劑と雜作なしに、いきなりこすりつけることに依つて色の繪が出来ると云ふことや、單純な手加減で濃淡自在の効果が得られ、混色もいきなり紙面の上で自由に行はれ、大きな線でも小さな線でも自由に得られるから塗る上の時間の經濟や、煩簡粗密に對する手致が單純であると云ふことや、手や紙面を徒らに汚すこ

となく清潔に保つことが出来る計りでなく、保存の上にも特別の手數がかゝらなくてよいと云ふやうなことに至るまで全く申分はないので、餘程健實な材料であると云ふことは私がこうして數へ上げるまでもないことである。

しかしクレオンは何處までも下學年の適材であつて上學年までも中心材料として使用せしむべきものではないことを、私は斷定するに憚らない。

その理由は次のやうなことである。

クレオンは使用方法が極めて單純率直であるが故に、下學年の兒童のやうに端的で觀念的な表現には實にピッタリしてゐていゝが、稍進んだ計劃的な表現、感覺的な複雑さを含んだ表現に取つてはあまりに單純すぎて技巧上の働きに餘地がなく、あつけないものになることを免れない。簡單な材料であるだけに表現された味は何處までも簡單なので、所謂リアルに迫まつて行かうとする寫實期に於ては少し進んで來ると、どうしても不足を訴へて來るのである。勿論表現する精神内容と云ふやうな、繪の核心に於ては、どんな單純な材料でも複雑な材料でもそれ



は問ふ所でないけれども……。

さう云ふ意味からクレオンを辯護するために、クレオンのいろいろな描方と云ふものが研究されるやうであつて、私などもクレオン書の描方と云ふものに就て、時々質問されるのであるが、クレオンはクレオンとしての味を生かすことに忠實であるべきで、書學紙を焙つて描くとペト／＼と油繪のやうに出来るとか、かいた上へブラシをかける面白いか、布で強く摩擦するとどうとか、或は色を重ねて置いて針や小刀でかき起すといふとか、その他いろいろなやり方が随分あるのであるが、すべては思ひつきに過ぎない。さうしたいろいろな細工が出来るからクレオンの技法は千遍萬化で決して單純な材料でないなど、思ふのは大變な誤りである。

さう云ふいろいろな小細工は單にさうしたことも出来るには出来るまで、あつて、そんなことに許り没頭してゐたのでは、いつまでたつても美育の健全な道に入ることは出来ないと云ふものである。

クレオンの生命は單純素朴に彩書を描出するところにあるので、いつまでもクレオンに引かゝつてゐると、つまらない小細工に淫し無意味にクレオンを弄ぶことになるのである。

又クレオンはテカ／＼光つてどうも安っぽい感を免れないし、あまり複雑な混色が出来難く、勢ひ色彩としても安價な感を脱せず、しつとりしたおちつきや潤ひが足りないから高雅な深みのある表現には、どうして適しないやうである。美に對する意識が次第に發達して後にはクレオン書ではどうも満足しなくなるのは避け難いところで、主材料としてはやはり下學年までのことである。どうも私としてはクレオンは小兒の玩具と云つた氣持ちがしていけない。

その外、觀念的な表現時代の表現材料を進んだ時代の寫實材料として引續き用ふることは一種の常套を呼んで、純眞の寫實的態度に對する障害となる虞れがあるので、この轉換期に於て中心材料の一新を斷行する必要を認めるので、クレオンは下學年に止めるのが至當と云ふことになるわけである。尙クレオンは技巧の

進んで来た兒童に取つても細密な描寫には不適當であることなどもその理由でなくはならない。

さてクレオンを如何に配當するかに就ては單に下學年と云ふけれども、尋三までをクレオン主材料で進むこととし、中學年上學年は水彩に主材料を置き、クレオンは全廢するのでなく、下學年で使つたものを時に應じて使はせて差支なく副材料の一つとして加へると言ふ方針にするのが適當である。

クレオンは製法が容易であり、小規模でも原料に無駄が出来ず、かなり割のいい仕事らしいので副業的に製造する向も澤山あつて、クレオン畫の流行を見てからは、多種多様のマークを打つたクレオンが續々として出来て来たやうである。これは使用者の側には手に入れることが容易で、安價になつて大變結構のやうであるが、よく注意しないと、いゝ加減の粗惡品を使はせられることになるので、さうした例もかなりあるやうだ。

第一いけないのは色が正しくないことである。利益本位で行く製造家では少々

色が不正でも安價な原料で大体似たものが出来さへすればいゝと言ふのであるから、さう言ふものを使はせることに依つて子供は色に對する正しい觀念を得ることなく、色の派生や配合、さては混色と言ふやうな、色彩上の法則的な修練又は經驗と言つたやうなことが、下學年から左程嚴密に行はれないにしても正しい素養と言ふ点で大變不都合である。

繪具の色が正しくないと云ふことで自然の色調を見るのに正しくない繪具に結合する結果、健全な理解を缺くやうになることも随分あつて、繪具に支配されて繪全体の調子まで變調を來すやうなことになるから、色の正不正は充分の注意を拂はねばならぬ。少くとも三原色、三間色位は誰でも正しい理解がなくては色彩の基礎が確立してゐるとは言へないのに、粗惡なクレオンでは、さう言ふ点で遺憾なものが非常多いのである。

次には、原料に注意しなかつたり、まやかしものを使つたりする關係上早く褪色したり、塗る場合に糟が出来たり、寒い時は非常に硬くなつて折れ易く、暑い

時候は軟くなつてグニャ／＼に曲つて見たりすることも随分ある。もつとひどい  
のになると、或物質を染料で染着してゐたりして言語同断のものさへある。  
兎に角クレオンを選択するた當つては只安價なものと云ふ許りでなく質に就て  
充分吟味しなくてはならない。

大會社のもので定評のあるものは相當の研究もされ、色の正しさに就てもかな  
り注意されてゐるやうだから、安心して使用出来る筈である。尙兒童が思ひ思ひ  
にいろんなクレオンを持つてゐることも一面面白いことではあるが教授の便利  
や、粗悪品の驅逐と云ふやうな意味から學校で選定したものを一齊に持たせる方  
がよろしい。

タチノ、王様、サクラ、第一などならば安心して使へると思ふ。

次に色の種類であるが、大体尋常三年までであるから、通じて八色で充分と考  
へる。十二色、十六色、などは特別な兒童でない限り必要はあるまい。副次材料  
として尋四以上の兒童に持たせるとしても下學年の使ひ残りで結構で多色のもの

を新調させる必要はない。

八色の色の種類は如何様にも組合はせられるが大体次のやうなものであらう。

- タリムソンレーキ (紅)
- クロームエロー (黄)
- ブルツシヤンブリユー (青)
- ライトレッド (赤褐)
- グネリヂヤン (緑)
- カドミウムネレンヂ (橙)
- アイボリートブラック (黒)
- チヤイニーズホワイト (白)

之で大抵間に合ふ筈で、市販のものも大体さうした組合せになつてゐるやうで  
ある。

十二色になると此上に

コバルヴァイオレット

コバルトブリュー

ローズマダー

エメラルドグリーン

と云つたやうなものが加はることになつてゐる。

クレオンは随分強烈な材料で強くかけば油繪のやうな効果を持つて来る程であるが、又どんなにでも軽い調子を望むことも出来る。寧ろネチ／＼した油つこい調子よりも軽く爽快な調子がクレオンの持つてゐる味であると思ふ。こうした淡雅な取扱ひが忘れられて、無暗に濃くゴシ／＼と塗り重ねることのみ流行してゐるのだが、考へ物であると思はれる。淡く行くのは軽くクレオンを使つて行くのであつて、表現に意を持たせる上から言つても大切なことであらう。

淡くするために塗つた色の上に白をかけるなどは繪具の清新な味を殺してしまつて不愉快なものにするし、ハイライトなどを作るのでも白は利かないのである。

から、クレオン畫では白い紙の地を利用することを何處までも忘れてはならない。

色の紙を使用するのは全体の調子を統一的に調べるためであつて、隙間なくクレオンヲ塗り潰させるためでない。だからこの場合もやはり紙の地は充分に生かさなくてはならず、黒い羅紗紙などをクレオン畫に使ふのは考へものである。

クレオンの白は色の紙を使用するときのみその必要があると考へてよく、寧ろなくともあまり差支はない。

反對に黒はどうしてもなくてはならぬやうである。黒を混色することは一般に小さな兒童に取つては必要ないことであるが、鉛筆とクレオンとはどうしても食ひつきが悪いので、形は大體鉛筆で取るにしても、シツカリと物のアウトラインを入れる時など、他の色ではどうも面白と行かないから、スツバリと黒で入れさせることは下學年の兒童に取つては餘程大切なことと思つてゐる。

むしろ鉛筆で形を取つてから着彩など云ふ、分割的な製作過程などは、兒童

の端的な表現の心理に適しない場合が多いので、いきなり黒のクレオンでスバ／＼と形を描かせるなど、云ふ方が表現がいかにも生々して自然である場合が多い。

それが鉛筆のまゝで置くと鉛筆そのものが、クレオンに比して非常に弱いものだから、その時はそれでもよいが色をつけると負けてしまつて見つともないことが多いやうである。

この場合消して直すなど、云ふ風に子供の繪をむつかしくしないで、鉛筆の代用に黒のクレオンを使ふことはよほどいゝやうに思はれる。少しそう云ふ流義でやつて見ると消して直さなくともいきなりよい形が、生きた形が率直に取れるやうな慧敏な働きを養成して來ることが出来るものである。

要するにクレオンは健實ないゝ材料として、又下學年の表現に好適の材料として、尋三までの中心材料に採用することとする。

### ●パステル

パステルはクレオンとは大變味が違ふ。クレオンから見れば高尙な材料である。色も美しいし、クレオンのやうに安つぱくチカ／＼光らないで幽麗で如何にも貴族的で氣品が高い。

色の粉末をそのまゝ、押し固めたものであるから塗る上にも非常に着きがよく、いろ／＼クレオンよりも遙かに優れた点を持つてゐる。

しかし困ることは値段が少し高いこと、早く無くなると云ふ經濟上の点と、粉つばいために不潔に流れ易く、大勢が一室で製作するやうな場合衛生上から眺めてもよくないし、殊に成績品の保存は大變厄介なもので、非常に剝落し易いものだが、之を防ぐいゝ方法がなく、大勢の兒童を一時に取扱ふ小學校ではどうしても健實な材料であるとは言へないのだ。

單に製作すると云ふ丈けの点に重きを置かならば非常にいゝ材料であるが一般的でないと思ふのである。實際パステルも一時の流行であつたやうである。たゞ特殊な兒童にはやらせるのもよいだらう。

パステル畫をかくのは普通の畫學紙でなくパステル用紙と云ふ特別の紙があるが、羅紗紙のやうな稍毛羽立つてゐるやうな紙ならば乗りがいくやうである。

パステル畫は混色は禁物であるから、専門家になると何十何百と云ふ色の種類を用意してゐるわけだが、兒童の製作としては濁らない程度に混色することや、指でこすつてばかしの効果など出すことも色數が少い丈けに仕方がない。

パステル畫を止めるには、無暗にシケラツクの液などを吹きかけても變色する丈けのことであるから、さう云ふことは寧ろやらないがよく、硝子張りの額に入れて置くか、平素は、バラフィン紙に包んで仕舞つて置けばよい。

強いて定着しやうとならば、揮發油に、ベルニアタブローと云つて油繪の艶油を滴下したものを（二十倍液位のもの）何度も霧吹きで吹きかけるといゝのである。

### ●クレパス

パステルのやうな高雅優麗な味を出し、クレオンのやうによく定着するものを

と考へて生れて來たものがクレパスと云ふ折衷物である。バスオンとかクレオパスなど異名のものであるがすべて似たやうなものである。

折衷物にろくなものがないと云ふ概念で言ふわけではないが、此種のものはどうも私は感心しない。成程クレオンのやうないやな光澤はなく、パステルの様にボカ／＼と剝落はしないけれども、脂肪や鹼化物のやうなものを使つてペト／＼した感じで、沈潜した色があるかと思へば、浮動した色があつたり。ホワイトで淡めるのだと云ふわけで、紙面で無理な混色をやる關係上、兎角繪が不緊密になり勝ちで、繪で最も大切なリアルの問題が閑却され、偶然な一種の味の様なものを狙ふ結果がかなり多いと云はねばならぬ。殊に糟のやうなものが塗る一方から出來て來て始末が悪く、かいて行く上に大變不快である。それは丁度、降り上りの粘土道を歩くやうな一種の不快である。之を制するためによく指を使ふのであるが、それが繪をどこまでも健全なものに仕上げないで、偶然な氣まぐれの味に終ることが呼び起され易い。尤もクレパス類は色は相等に重く味にも強いものが

あつて、色感としては奥行は充分にあつて、さう云ふ点で面白いには面白いが、それも相等繪の修練の出来たものが手際よく使ひこなす時の面白さであつて、兒童の常用材料としては決していゝものではないと私は思ふのである。

あの觸はれば繪の繪具が手にくつついたり動いたりしさうな、ジメ／＼した味は私はどこまでも不賛成である。又繪の味としても、どうしても概念的になり、詠嘆的になり、それも筆觸の必然性から、極めて粗大なものしか表現されず、忠實なリアルな追及などには何處までも不適當である。殊に黒い羅沙紙などへところがまだらにクレバスを塗りつけたやうなグロテスクと言ふよりも、酒に酔つたお化のやうな繪を見るのは御免である。クレバスでかくならやつぱり白い紙にクレオンを使ふつもりでかいたらいゝのに。

何しろクレバス類はあて込みものとしか思はれない。決して健實な材料である。私には思へない。だから私は取らない。

夏使ふクレバスだの冬使ふクレバスだの、拵える方でも厄介だらうが、使ふ方

でも厄介至極だ。

### ●水 墨

水墨畫と言ふものは昔から東洋にあつた。日本にも鳥羽僧正あたりから始まつて、鎌倉室町以降随分盛に行はれたものである。しかしそれはすべて専門家の畫業であつて、こゝに言ふ水墨畫はさう言ふむつかしいものを言ふのではない。只墨はすべての繪具のうちで淡から濃に至る奥行の一等深い材料であるから、モノクローム（一色畫）を作る上に好適であるのと、水と言ふ流通加減の自在な媒劑と、毛筆と言ふ之又剛柔、變化の自由な、しかもわれ／＼日本人に取つては遠く歴史的に最も親しみ深い道具とを通じて、何等技法的束縛のないところで自由な素描をやらうと言ふのである。

其處には木炭や鉛筆などの乾性材料と別種な潤ひと、高雅な味とが日本人的な趣味に生動して來る筈であつて、單なる線や点のみの素描と云はず、濃淡の陰影を施した忠實な素描と云はず、單に素描としての價值の上に別個の持味が生れ

て来る点に於て極めて面白い素描材料であると私は思つてゐるのである。しかもそれが濕性繪具である点に於て直に水彩畫への前提となり、濕性繪具の驅使に自然習熟し得るところから、水彩へ入るのに非常に樂になつて來ることが出來ると云ふものである。

一見兒童に取つては非常にむつかしいやうにも思はれるが、やらせて見れば實にわけのないもので大變面白くやれることは事實である。

水彩を大体尋四から採用するとして、尋三頃からそろ／＼水墨を採用するのであるが、何もむつかしく筆法などを云ふのではなく單に水墨でかくと云ふに過ぎないのであるから、恐れることなくグント／＼やらせるに限るのである。

水彩用具が整つてゐれば繪具のブラックを使つてやればいゝので尋四からは水彩の間で時に應じて水彩用具でやらせるとして、その前身である尋三では、道具としては習字の道具をそのまま用ひることにすればよいのである。

硯に水を澤山張つて、岡の方で濃墨を磨らせ、海の方はそのままにして淡墨用

とする。筆は習字の筆で澤山だし、紙も半紙や、藁半紙と云つた安價なもので澤山かゝせ、時々書學紙へかゝせると云ふ風にして、熱を持つてドン／＼やらせるのである。鉛筆で形を取らせて置いてもよいが、初めから失敗してもいゝから、いきなり筆でかいて行くと云ふ風にしたのがよいやうである。

只氣をつけなくてはならないのは、筆の整理であるが、之が仲々出來難いので墨の濃淡や墨汁の含まし加減に就てはよく氣をつけてやらなくてはならない。大てい小布片や日本紙のやうなものへ吸ひ取らせて筆の墨加減をやらせるのであるが、最初一通り此技巧を呑み込ませて置くといゝやうである。

兎に角端的で、最初から決定的であるから、モチーブ乃至主觀のひらめいたものが出て來ずにはゐないので、全く活氣のある仕事として價値は非常に高いと云はねばならない。

水墨の採用は近年次第に盛になつて來た様であるが、未だ相等に目新しいことに屬するから一般的でないとしても私は進んでこう云ふことは取入れること



にした。

この水墨の素描に軽くクレオンで彩色するなど、云ふことも大變面白く、よく調和するやうである。

### ●水彩

水彩はクレオンに壓倒されて一時影を潜めて居たのであるが、水彩の持味はどこまでも捨て難く高雅で健實ないゝ材料であることは動かせないで、近時又水彩の熱が揚つて來つゝある。尋三でクレオン主材料を打切るとすると後はどうしても水彩でなくてはならないと思ふのである。

味もあり、品格もあり、潤ひもあり、あまり強い材料ではないが、濃淡自在であり、色の混和が自由で複雑な色調が得られ、筆觸にも自由な味を持たせることが出来るし、リアルな追求も深めることが出来るので中學年以上の中心材料として、これの右に出づるものはないと思ふのである。

只少し道具立てがいり、技法が稍複雑でむつかしいと云ふのであるが、それも

大した困難ではないと思は信するのである。

大抵水彩をやるにしても尋五以上とか、高等科と云ふ風になつてゐるのであるけれども、私はいろんな事情を考へて、少し早いと云ふ人があるかも知れないが、尋四から大体水彩にするのが至當であると思ひ疑はないものである。

先づ技巧がむつかしいと云ふのであるが、それは水彩書と云ふものはこうなくてはならないものだと思ふ先入感で考へるからのことで、何も水彩書にこうしなくては水彩でないと思ふ規則がある譯ではないので、水彩繪具を使つて描きさへすれば水彩書なのであるし、水彩繪具を使つて描きさへすれば自らにして水彩書としての持味は生れて來る筈のものである。本當に水彩繪具としての特質を生かすためには仲々深い習練があるので、それは専門家のこと、最初は單に自然に生じる水彩の味だけで結構なのである。單に彩色するのにクレオンでなく水彩繪具を使用するのだと思ふのでいゝのである。鉛筆や水墨などの素描にチラホラと水彩繪具で彩色するとかクレオンと混用するとか極く軽い調子でいきなり色で簡單

なものを描くとか云ふことから始めるに何のむつかしいことはないのである。

さうして早くから水彩繪具に慣れて来れば次第にどんな複雑な仕事にも、またどんな水彩畫獨特の持味や技巧にも達して来られると云ふものである。

程度が高い、程度が高いと云つて、近頃の初等教育は少しやさし過ぎる教材許り多くはないだらうか。昔の子供は随分むつかしいことを平氣でやつたものだが、相等に興味も持ち、自覺も高かつたやうに思ふ。水彩が尋四でむつかしいなご、考へるなら御飯を箸で食べるなんか随分むつかしいことだから………とも云へることになる。

次には經濟上の問題である。單に金持貧乏と云ふこと丈けでなく、あまり經費を嵩ませるやうなことは決していゝことではない。水彩畫となるとクレオンより金がかゝると誰でも思ふのであるが、實際はさう大したことはない。やり方一つで却つて經濟に行くのである。

近來は小學校用として水彩用具に相等研究が拂はれて來たので非常に思ひつき

易くなつた。櫻木製の煉り込み六色繪具などは塗りが印刷になつて居るパレット附きで三十五錢と云はれて居り、溶色が極めて容易で固ることがないのを特色として誇つてゐる。

私がいゝと思ふ立野商店の製品を一例に取ると、

チューブ入り一本七錢、六色を揃えたスマレ印(一組三十五錢)と、塗りが印刷になつてゐる小學校用パレット(一個二十錢)を一組として定價五十錢となつて居り、茶軸彩色筆が十錢であるから、少し奮發すれば何でもなく、一時に出すことがむつかしければ少しづつ貯金させて置くのもよく、大變金がかゝると云ふわけのものではないのである。殊に水彩繪具は少量づつ使ふのだから、よく注意して使ひさへすれば、長く持てるので一時に金を出すやうでも却つて經濟なのである。

水彩の繪具に就て少し具体的にかいて見やう。

### 1、繪具

クレオンの項で挙げた會社の製品ならば大体間違ひはないが、玩具式の粗製品を使はないこと。教授の便利上まとめて同じものを使はせること。使用後は煉製ならばよく水氣を取つて置くこと、チューブ入りならば、よく蓋をして管内で空間を作らないやうによく尻を巻いて置くこと。などに注意すべきであり。

色の種類は次の六色で充分である。

クリムソンレーキ、

クロームエロー、

ブルツシヤンブリュー、

ヴィリヂヤン、

ライトレッド、

アイボリーブラツク

八色にしやうと思へば、

ヴァーミリオン、

チャイニーズホワイト、

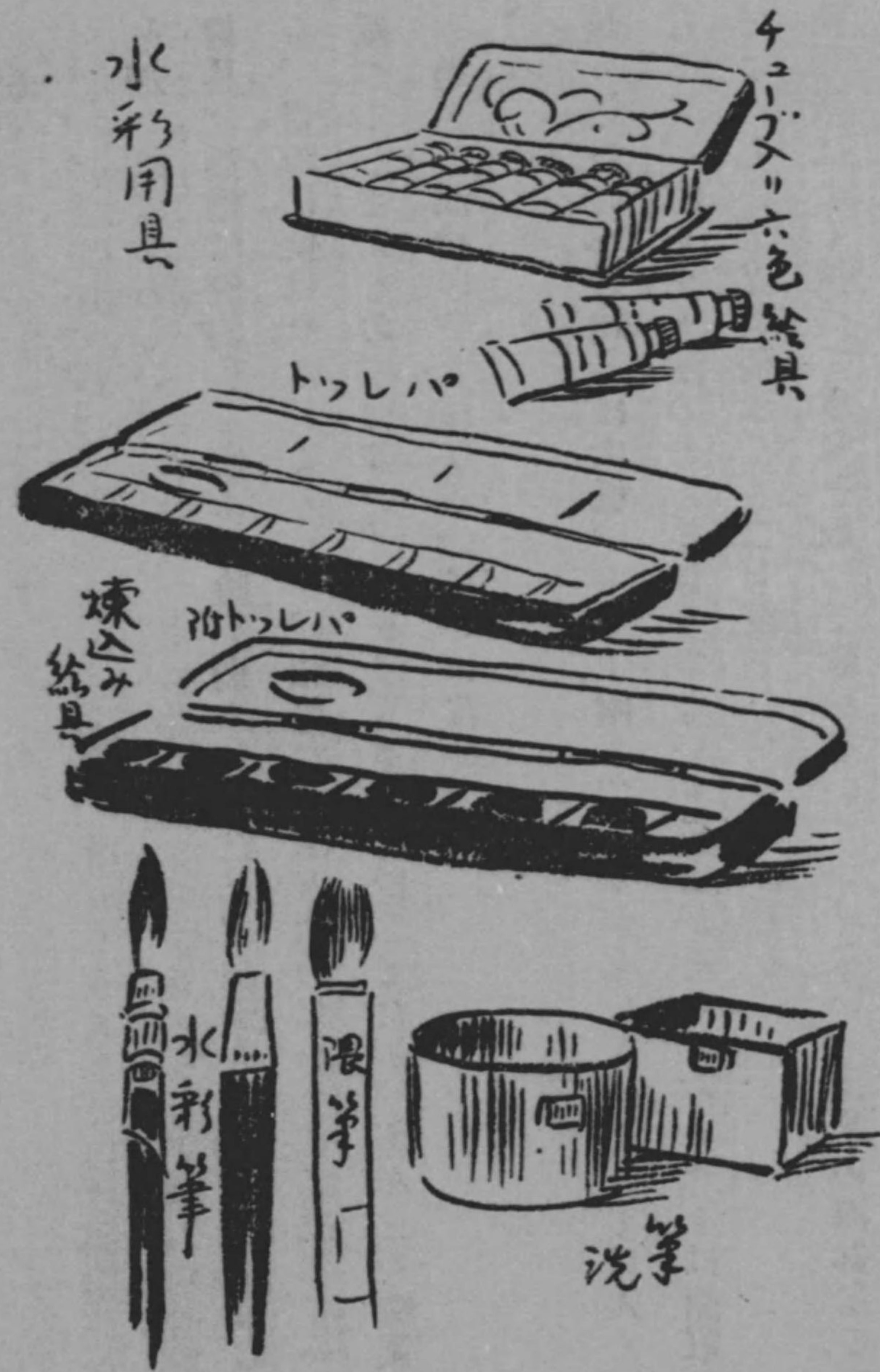
を加へればよろしい。

繪具を無暗に儉約して使ふと繪が弱くなつたり、ひからびたものになるから、豊厚に使はせるがよろしい、相等たつぷり使つたからとて決して一時に減つてしまふものではない。ケチ／＼させないことだが、あんまり惜氣がなさ過ぎて油繪のやうになるのはいけない。

## 2、パレット

煉り込みの水彩繪具は大抵パレット付きであるからいゝがチューブ入りのになると、パレット附のものどさうでないものがある。パレットは簡單なのでよろしい。立野製などは二十錢でいゝものがある。

使用後はよく拭つて水氣を取つて置かないといけない。従來の梅鉢などでもいゝけれど取扱ひにも繪具の經濟にもあまりよくないと思ふ。



3、筆

筆は一本で澤山である。大きいのがいゝけれども大きいのは高價だから中位のもので結構である。特別に水彩筆と言ふのがあつたから適當なのを撰定するといゝが、相當腰の強い、毛の澤山あるものがよい。日本畫の限筆や習字用のでも結構であるが、習字の筆は穂先が尖り過ぎて不快な筆觸が出るから一度熱灰の中をまぜると程よく先きが切れて使ひ易くなる。しかし之は加減がむづかしい。

4、筆洗

筆洗は空瓶でも湯呑みでも結構であるが、パレットへ引掛かるやうなものならば野外寫生の時なども非常に便利であるから畫用水筒の蓋のやうなものを作つて、トタンか何かで鉄力屋に作らせるといゝだらう、まとめてやらせば三錢か五錢で出来る筈である。立野では十五錢で体裁のいゝものを作つてゐる。

## 5、用紙

書學紙で結構である。やかましく云へば切りがないが普通の書學紙でいゝと思つてゐる。却つて粗悪な薄い木炭紙などは紙に力がなくて使ひにくい。ブロックになつてゐるものは都合がよい。さうでないものは畫板へピンで止めることを忘れてはならぬ。

## ●テンペラ

水彩繪具と油繪具とのあひの子のやうな材料である。水で薄くすると水彩のやうになり、濃彩で行くと油繪のやうになる。元來水彩繪具は透明繪具で上へ重ねた色を透して下の色も見え、重色することに依つて色を混和せしめ得るのが特色であるが、テンペラは極く淡くないとそれが出來ないので大体不透明繪具と言ふことになつてゐる。だからその点でいろ／＼便利もあるので、殊に圖案などをかくには重寶である。

ホワイトを使つて色を淡め下の色に構はずかいて行くところなどは繪油のやり方であつてリアル<sup>リアル</sup>の追及にも自由性があり、いゝ材料には違ひないのであるが、少し高價なものと、驅使が一寸面倒なので小學校用としては暫く見合はせることにした。しかし追々流行して來るやうだから高等科などで使はせるにはさして困難ではあるまい。十二色一組壹圓位である。

## ●油繪具

フランスの片田舎などでは村の荒物屋で油繪の材料を賣つてゐるさうである。それは小學校の子供の圖畫の材料なのである。

さう云ふ時が日本にも來るかも知れない。新しいことを競争する東京などでは小學校でも近頃は油繪を始めたやうだし、或學校では油繪をやると云ふので油繪具を兒童自ら製造してかくことをやつたと云ふので人に笑はれたさうだし、氣の早い人達も随分ある。流行は恐ろしいもので、今に小學校も油繪でなくば駄目だと云ふことになるかも知れないが、それはその時のことにして、私は水彩で結構だ

と思つてゐる。安い油繪具もいろいろ見たが、一通り道具や繪具を揃へるとそれでも仲々高いものになる。

何しろ油繪具がいくつものであることは間違ひはないので、子供にもあんな自在な深味のある材料でやらせたらとは萬々思ふのであるが、それはもつと國民全体が金持ちになつてからでなくては問題になることではない。

### ● 尺度と定規

尋二から尺度と定規を使はせるのであるがむつかしいと思ふならば、親しませると考へて頂き度い。取扱ひ方に依つてはこんな無味乾燥な材料が生きて來るのだし、早くからこう云ふことは大切な躰であると私は信じてゐる。

尺度はメートルで定規の縁に目盛りしてあるのでよろしく、定規はセルロイド製のもので中位の大きさを一組。價十五六錢。圖案用。

### ● コムパス

コムパスは尋三から使はせることにする。丸のまゝの鉛筆がはまるやうなので

丈夫なものがよろしい。價十錢位である。之も圖案に活用するのである。

此期の兒童用具はすべて玩具である。只高尚な玩具であるに過ぎない。

### 書 板

下學年は別に書板の必要がない、若し必要があれば紙挟みを代用すれば結構である。

水彩書をやるやうになればなるべく書板を持たせる方がよい。紙挟みでも差支はないが……。

至極簡單なものだから作らせる方が何かと便利であらう。普通のボール紙四枚重ね位の厚さで充分である。四切書學紙が載る位の大きさをよろしい。作り方は設備カルトンの項にあるが、纏めて作らせば一枚十五錢位で出来る筈。

### 二、各學年兒童用具の配當

今まで列舉したもののうち採用する用具を纏めて學年に配當して見ると次の通りである。すでに充分説明したから左の表に就ては説明を省略する。

○	○	○	◎	○	○	○	高二
○	○	○	◎	○	○	○	高一
○	○	○	◎	○	○	○	6
○	○	○	◎	○	○	○	5
○	○	○	◎	○	○	○	4
	○	○		○	◎	○	3
		○			◎	○	2
					◎	○	1
畫板	コンパス	尺度三角定規	水彩用具	水 墨	八色クレオン	鉛 筆	

三、用紙に就て

用紙はいろいろあるけれども書學紙が一等健實なやうである。ところが書學紙でも紙質に色々あつて、いゝものはやはり高價であるけれども何の用具に對しても相當粗面で、厚く、あまりポカ／＼と軟くない方がよろしい。書學紙の表裏は一寸わかり難いけれども、よく見ると布目のある方が裏で、表は大てい少し粗面

になつてゐるのでわかる。

木炭紙や、日本紙、色紙、洋半紙、色々な包装紙、襖紙、等々種々の色調や、紙面の變化を教材に生かして、時々用紙にも變化を與へることは非常に趣味の深いことであり、面白い効果も得られていゝことであるからやらせ度いものである。

殊に圖案の教材などにはいろんな紙をうまく利用すると大變面白いものである。

紙面の大きさは繪をまどめる力に對して關係の深いものであるから最初は大體狭く次第に廣い畫面へと進むのが標準であるが、教材に依つて一概に律し去ることのないやうにし度いものである。例へばしつかりとデッサンをやらせやうと思ふやうな時に小さな紙を使はせるなどは意味のないことであるから、下學年の子供と雖も相當大きな紙を用ひさせることが肝心であり、大きな兒童でも微細な描寫を主としてやらせる時などは小さな書學紙で結構なのである。又形でもいつも

四切とか八切とか云ふのでなく細長いものでも方形に近いものでも、教材に依つて適当な形の紙を用意すると云ふやうに、出来る丈け自由にして、製作の態度に新鮮さを與へる方便とする用意までもあつてよいと思ふのである。括弧内のは副次的に使はせる型である。

高	二	高	一	6	5	4	3	2	1
四切以上	四切以上	四切	四切	八切	八切	十六切	十六切	十六切	十六切
(八切)	(八切)	(六切)	(六切)	(四切)	(四切)	(八切)	(八切)	(八切)	(八切)
(六切)	(六切)	(八切)	(八切)	(六切)	(九切)	(九切)	(九切)	(九切)	(九切)

設備



### 一、圖書科設備の不備

昔新定畫帖で臨畫一点張りの圖書が何の反省もなしに只手先の器用を練習するために、只わけもなくお手本を機械的に寫し取るために行はれてゐた時代には、特別に圖書科の設備と云ふものはいらなかつた。學校經營として別段圖書科のために頭を悩す必要がなかつた。しかし今や圖書教育は一切の知的實用的教科の偏重を救ふ情操の教育として普通教育上極めて重要な地位を占むるものであることがわかり、教育的價值の極めて重大であることに氣がついた以上、之が使命を完全に果さなければならぬことは誰しも思ひ一致するところである。

圖書科の價值の深さは、其新生面の開拓に依つて次第に發見されたのであるが、其新生面とは従來行はれ來つた記憶畫(思想畫)圖案の中にも遺憾なき發見を示してはゐるが、寫生と鑑賞の二つに重要な意味を托するところにあるのは何人もよく承知してゐる筈である。

然るに圖書科の眞の意義と價值とが、一日も忽緒に附し難き程の重大さに於て

認められながら、然も歲月之を久しくしながら、國を擧げて殆どすべての學校當局がその寫生鑑賞に緊密なる設備の上に何等思ひを致すことのなかつたのは實に不思議に堪へぬことである。

不思議と云へば更に吾人の之を深くし、吾人をして長大息せしめるものは教育制度上圖書科進展のために、寧ろ以前に異なる制度の改廢を見たことである。しかし今は之を論ずる時でないから暫く措くとしても、わが圖書科の眞の使命を果すべくその運用に必要な程の設備はどうしても之を整へて置かなければいくら實績を擧げやうとしても只徒らに手を空しうして終るより外はないのである。

事實今日全國に於て圖書の特別教室を持ち、寫生材料を整へ、鑑賞資料を一通り完備してゐる小學校が幾校あるであらうか。更に圖書科のために特別の豫算を配當してゐる學校が果して幾校あるであらうか。思ひ來らばわれ等は其矛盾に、その無考慮に驚かざるを得ないのである。圖書科の眞の意義は未だ認められざるか、未だ世を擧げて維新以來の物質的實利的教育の一切が然もその一切より出で

ざりし教育が國民をして悉く唯物論者たらしめ、救ひ難き世相の禍根を醸したることより醒めざるか。未だ斯くの如き教育のみに急にして圖書科に一顧だもするの暇がないのであるが、圖書教育の眞の運用は只口にその價值を唱へるのみではいつまで待つても出来ることはない。われ等は眞に焦慮してゐるのである。爲さんと欲して決して難きにあらず。僅少の費用と一舉手一投足の勞を惜まないならば直に爲し得られるのである。彼の歐洲大戰直後、理科の重要性を認めたことに依つてその施設の上に多大の費用投をして惜まなかつたことを記憶するが、わが圖書科は左様に多大の費用を要求するものではない。

われ等は最も謙讓なる願慮を以つて、以下最も行はれ易かるべき方を提出する。一日も速かに設備の完成が圖書科のために果されるやう祈つて止まぬものである。

## 二、教室と準備室

裁縫、理科、唱歌、手工、家事、何れも大抵特別教室が與へられてゐる。之は

決してハイカラがつて與へられてゐるのではない。又進歩した教育的設備として與へられてゐるのでもない。どうしても特別教室がなくては仕事が出来ないのである。今日何處の學校でも同じやうに一方に廊下が通り、二面が硝子の總窓で他の二面が壁で、一方の壁側に教壇があり黒板が吊され、室一杯に机と腰掛けが並べられた普通教室と云ふものは、讀方や算術や地理や歴史、さては農業の講義などには理想を云へば限りもなからうが、先づ先づ差支ることもなく、考へ方に依れば理想的であるとも云へる。元々普通教室と云ふものはさう云ふ學科のために設計せられたものであつて何の學科にも流用出来るやうに作られたものではない。

昔と違つて圖畫は逆もこの普通教室では思ふまゝやれないと云ふよりも、どうにもこうにもやりやうのない現在の内容にまで進歩してゐる。昔のやうに臨畫一點張りで結構だと云ふならば何も特別の教室を設ける必要なく現在のまゝ普通教室で澤山であるが、寫生や鑑賞を重大な内容とされた今日、それは決して普通教

室で出来るものではないのである。出来ないことを無理にやつたところでそれは何等得るところのない無意味な時間を不合理だらけの中に汗をかきながら空費する丈のことである。例へば普通教室の机を台にして手工で木工の鉋削りをやるやうな不都合をあらゆる場合に繰返さねばならないであらう。

とまれ美に浸り繪をかくと云ふにはどうしても境地を作らねばその氣持になれるものではない。その教室に這入ると同時にその教室の持つ空氣に依つて、それは掛けられたいろんな繪や、並べられた寫生臺や、さては戸棚の中からのぞいてゐるいろんな寫生材料が何かは知らず送つて來る電波、垂れ下つたカーテン、盛られた花瓶の花、壁に立てかけられた額縁の光る金色。そう云つた渾然たる雰圍氣が、這入ると同時に兒童の心持を今までの世界と打つて變つて美に對する敏感さを甦らせて來ること、何かしらさうした空氣の中に浸る心持、それはまことに重大なことである。智的な教科の後の心持から翻然と情味の世界へ立ち返り、美に向ふ心持を作つてやることは、先づ圖畫の時間の始まる第一歩であつて、圖畫教室

の必要なる第一の理由である。

圖書教室に行けば、いろいろ優れた畫家の繪や先生の繪や、さては自分達の繪が一面に飾り並べられてゐるに實に楽しく、美しい草花の鉢もあり、形の面白い壺や、綺麗な壁掛けなどもあり、石膏の人形もあれば、金魚も飼つてある。先生の机の上では版畫の仕事が出来上りかゝつてゐるし。

兎に角兒童には唯一の楽しい部屋ではあるまいか。家庭ではさう云ふ方面で少しも恵まれてない子供達が多いことゝ思ふ、せめてさう云ふ鑑賞の世界、乾き、ひからびやうとするさうした多くの子供の心に滋雨を與へるやうな設備がせめて學校に丈でもなくてはならぬのではないか。美術はまだ僅かしか、ほんのぼつちりしか民衆のものとはなつてゐない。しかし何時までも、貴族や富豪の獨專物であつてはならない。美術こそは又人生の大事な糧の一つであるとするならば、せめて學校の教育に於て一般化する必要があるのではないか。即ち兒童にとつて唯一の美の殿堂たる圖書教室の必要なる第二の理由である。

僅かに十分の休憩時間で大騒ぎをして教室の机や腰掛けを片づけ、モデルを布置し、兒童を配置し、光線を調節し、あらゆる準備を慌しい中にやつと終へて、息つく間もなく寫生畫の教授をする。やがてそれを又それと同じ慌しさの中に元の状態に戻して次の時間の教授に移らなければならぬ。さうして額に汗して働くこと云ふことに興味を持つ人もあらうが、子供は兎も角として大抵の先生は圖書の時間がいやになつてしまひはせぬか。不自由の中に道を求めると云ふことはい、ことかも知れぬがそれでは少くとも兒童も先生もゆつたりとした静かな氣持、安んじた氣持で心を打ち込むことが出来るものであらうか。美を求める心に全く反對な慌しさから立たゞしさをどうすることも出来ないではないか。更にさう云つた心持の上だけでなく教授、指導、製作とすべての方面であらゆる不便が重つて來ることをどうすることも出来ないではないか。普通教室では或種の教材が極く軽い意味でなくては圖書教授は到底出来るものではないのである。之圖書教室の必要なる第三の理由である。